隨筆

おちゝ集

岡島藤人著

特222
165

始

特222
165

隨筆 おちば

岡島藤人著

天理時報社版

昭和十五年六月
帝國圖書館

祖父ちやんが
ゐまさずなりて
父ちやんが
おち葉を掃くと
子らはいふなり

藤　人

自序

こゝ三、四年間に書いた隨筆を丁度雜木のおち葉を熊手で掻きあつめるやうな調子に、順序もなくたゞ熊手に引懸つたまゝに集めてみました。

從つて前後の連絡もなく先に書いたものが後になつたり、後のものが先になつたりして、それこそ雜然としてをります。

一つ〳〵を拾ひ上げてみますと、焚附けにもならぬほどに朽ち果てたものもあるかも知れません。

時勢は小川のせゝらぎのやうに流れてをります。殊に

聖戰以來の日本の思想界は百八十度の轉換をいたしてをります。轉換と云ふよりは、むしろ日本の本然の姿を現はして來たと云ふ方が正しいのではないでせうか。

かき集めたおち葉には、それ以前のものも、以後のものも混つてをります。今日から見て、こんなものと思ふのもあるとは思ひますが、それもそのまゝに拾ひ上げました。

おち葉は雜然としたところに、却つて捨て難い味があるのではないかとも思ひまして。

岡島藤人

おち葉

○

他人の缺點ほど、眼につき易いものはない。さういふよりは、缺點が、他人の上に現はれたときほどはつきり認識されるものはない。そしてそれと同じ缺點が、自分自身の上に現はれても少しも氣がつかぬものである。これは人間の悲しい錯覺であらう。

だから他人の上に缺點をみつけた時は、同時にそれが自分の上にあらはれたものとして、するどく反省することが必要であ

る。

人がかゞみや……と教祖様が教へられたのはこの事を申されたのであらう。私達は、すべての人々から、毎日尊い教へを受ける事が出來る。

○

すべての人々が師であるといふ事は、すべての人々から教へをうけとるだけの、謙讓さと聰明さとをもつ人でなくては悟り得ぬ世界であるかも知れぬ。

この世界はいつも公開せられてゐる。公開せられてゐながら、その世界の見える人と、見えぬ人とがある。それが信心の世界であるかも知れぬ。

○

まことは斷じて、敗北する事がない。まことを捧持する人々が時に敗北したかのやうに見ることがあつても、實は決してさうでない。

たゞ、かくれてゐるだけである。まもなく一層輝かしい光りをもつて、あらはれて來る。まことは、如何なるものにも、きずもつけられることのないといふ事は、危ぶみなく信ずるがよい。

人間心によつて得るものは、それは本當に得たのではなくて、生きることをきずつけるだけである。

まことに仕へて失ふものは生き

人間心によつて得るものは失ふのである。

この點は、まことに仕へる神の子供は、はつきりと確信すべ

きである。

○

宗教を信ずるといふことゝ、人生に活きるといふことゝは、同じことである。もつとも本質的な生き方をすることを、宗教を信ずるといふのである。

信ずるといふことは、聖なる生命の呼吸そのものである。

穏かな時には、かなり信心ぶかく見えてゐる人も、一たび何かの動亂の中に渦巻かれると、いつのまにやら信心を失ふて仕舞ふことがある。

かゝる人々は、信じてゐたのではなくて、信じてゐるつもりでその實は、神を玩具のやうに弄んでゐたのである。

玩具は眞劍な場合には、とりのこされて仕舞ふ。

生命的なものは、平素は意識しないでも眞劍になると、いよいよ力づよく光つてくるものである。

穏かな時には、玩具で遊ぶのもよいが、玩具はまさかの時には役立たぬ。

○

私はとても、肩をこらすくせがある。

按摩などしてもらつても、それはほんの氣休め位のものである。矢張り心がこるのだと思ふ。

一つの仕事にかゝると夢中になる、夜更しもする、不健康にもなる、それで居ながら、心がそれから離れない。仕事がスラスラ進まぬ。いよ〳〵かじりつく、心が悪くこり固つてしまふ。どうにもならなくなつて床につく、床についても心が離れ

ぬ、それがいけないと知りつゝも、どうにもその心を解放する事が出來ない。

そんな風に、何かにこつてゐる時は、一寸した事がイラ〳〵する、つい短氣にもなり易い。

一つの爭ひに『こる』のはいゝとしても、それから離れるべき時には、スラ〳〵と『離れる』修行をしなくてはいけないといふことをしみ〴〵思ふ。こり固るといふ事は、小さい我を押し通さうとする姿である。

物に應じ、物に通ずる、そのゆたかさ、それが自然の心とでも云ふのであらう。

肩のこるのは、執着が強いのだと、私は自己診斷をしてゐる。

○

仕事々々といふが、何か一つの業績でも殘さうとする氣持ち、それがすでに人間心でもあり、みにくい妄執である。本當の仕事といふものは、爲さうとして出來るものではない。我意・なしに自然に出來上つたものであつてこそ、後の世に殘る仕事であらう。

僧良寛の手紙に、

『病氣になる時は、病氣になるがよろしく、死ぬ時は死ぬるがよろしく候』

とあるが、いかにも良寛らしいと思ふ。

○

鮎は瀨にすむ、鳥は木にとまる、人は情けの下に住む……。

詩か俗謠か知らぬが、このうたの心を沁々味ふことがある。人が愛の下に育つばかりでなく、總てのものがみな愛の下に生き、育ち、そして成長するのではなからうか。

○

愛は惜しみなく奪ふ……といふた人がある。又或る人は、愛は惜しみなく與へる……と云つた人もある。奪ふことも、與ふることも、それはたゞ愛の一つの表現にしか過ぎないのであつて、この二面はいつも併存してゐる。

○

惜しみなく奪ひもするし與へもする。然し眞の愛といふものには奪ふとか、與へるとかいつた對立的な感じがないのではあるまいか。愛は自他の區別さへないのではあるまいか。だから

形の上に於ては或は奪ふやうにも見え、或は又與へるやうにも見えるけれども、それは決して與へるものでもなければ、奪ふのでもない。

愛は引き寄せる力をもつてゐる。愛するものは、愛せらるゝものを無意識のうちに自分のふところの中に引きよせる。それは引きよせようとするのではないが、愛するもの、愛せられるものが、共に双方から近づいて一つに解け合ふのである。

愛するものは奪ふやうに見えるが、奪はうとして決して奪ひ得るものではない。金のやうなものでも、金を奪はうとするものは、金の所有者になる事は出來ぬ。金を本當に愛してゐるものゝみが、金の所有者になり得るであらう。

人においては尙更のことである。彼を自分の所有にしようと

思ふたとて決して所有し得るものではない。けれどもその人を愛すれば、その人は自然に、自分のものになつてしまふものである。愛は不思議な力をもつてゐる。

だからと云つて、彼を愛すれば、彼は自分のものになるといふので、彼を愛するやうな愛は、それはこしらへた愛であるから、こんな不純の愛は何の力ももたぬ。

○

『女は己を愛する者の爲にくしけづり、男は己を知る者の爲に死す』といふが、男だつて、女だつて、同じことで、己を愛するものには自然に引かるゝのであつて、引かれ、引かれて、つひには一つに解け込むのである。

只愛せよ、不純な目的を離れて愛せよ、愛するものは弱い、

そして最も強い。愛する者は勝たうとはしない。そして常に勝つてゐる。愛には勝敗もなく、利害もなく、與へるもなく、奪ふもない。

○

道を愛するものは道を廣める。

國を愛するものは國を榮えしむる。

人を愛するものには人が集まる。

道を愛せざるものは道を失ひ、國を愛せざるものは國を亡ぼし。

人を愛せざるものは、人から逃げられる。

人を所有しようとするものは、ついに人を所有し得ないであらう。人を愛するものゝみ、人を失はぬであらう。

人に逃げらるゝのは、その人の愛の力が弱いからである。信者から逃げらるゝ教師は、信者を愛する力が弱いからであらう。

○

人の心の中で最もうれしいものは愛であらう。それだけに最も苦しく痛ましいものも亦愛であらう。

ある人が貧ほどつらいものはないと云つた。なるほど貧苦はつらいであらう。然し親子、兄弟、夫婦、親友と言つた愛の絆のないときは、貧苦のつらさもそれは極めて單純なものではあるまいか。

愛の絆の加はる時に、貧苦の苦しみが、本當に深刻なものになる。

○

別れがつらい。死が苦しいと云つたところで、これとても同じ事である。愛のないものと別れるのに何がつらからう。愛のないものゝ死が、何んで苦しからう。愛があればこそ別れが辛い、愛があればこそ死が痛ましい。

私達は對人關係の上で苦しむ事が相當にある。その何れの場合も愛の深淺の程度で苦痛の深淺が定まる。愛の薄いほど苦しみも淺い、愛の深まるにつれて、痛ましさは深刻になる。

どんな問題でも、愛に關係しない問題は簡單に解決がつく。愛の問題だけは、なか〳〵容易に解決はつかぬ、面表の解決はついても中實の解決はなか〳〵つくものではない。

私達が、進むことも、止まることも、退くことも出來ぬと云

ふやうな悲痛な苦しみを味ふことがある。その時はきつと恩愛の絆が手傳つてゐる。

○

愛の問題は複雑でもあり、執拗でもある。金錢の問題や權力の問題のやうにはつきりときまりがつかぬ。その葛藤こそ、ほんたうに綿々として盡きずといつた感がある。

大まかに、白とか赤とかときめることが出來ない。だから愛の深い人ほど苦痛が多い。

人間が愛執の心から解脱したなら、恐らく深刻な痛みといふものは殆んどあるまい。

泥田をふむやうに、右足をあげれば左足がしづみ、左足をあげれば右足が沈み、といつたやうな、どうする事も出來ぬはめ

に陷るのは、愛執の深いものゝ、はまり易い道である。愛の心の薄いものには、泥田に足をふみ込むやうな深刻な苦痛はあるまい。

○

神は慈悲の權化だといふ。慈なるが故に悲である。慈は愛である。愛は悲である。

○

人はつねに愛によつてなやむ、人の心に愛なくば斯くまでなやむ事はあるまいと思ふ事が屢々ある。然しこの愛は又人に力をも與へる。愛はなやみを生むが、同時に力をも與へる。愛は人を闇黒に追ひ込む事もあるが、又輝かしい光明にも導くのである、苦痛を與へるが、又それを忍ぶ力と命をも與へる。

○

熱愛の人は痛苦を辭せぬ、痛苦を逃避するものは、愛の稀薄なる人である。紅涙と溜め息とは愛執の苦痛に精進するものゝ姿である。かくの如く、愛は苦痛である。然し愛の苦痛は人を怠らし、衰へさせ、滅びさせるものではなくて、却つて苦しみによつて力を與へ、苦しみによつて蘇生せしめ、苦しみによつて常に向上せしむるものである。

○

ある教會の青年からの手紙に、

『教會の生活がいやになりました。虚僞と妥協なしに一日も生活の出來ない教會がつくづくいやになりました。私は教會を飛び出したいと思ひます。然し教會を飛び出しては、親に心配をかけます。幾人かの、私を信じてゐて下さる信徒の方々にも失望させると思ひます。又神様の御名までけがすと思ひます。さう思ふては又苦しい心をおさへて、辛抱してをりますが、果してこんな事でいゝのでせうか』。

私はその青年に次のやうな返事を出した。

『あなたがそれほど教會がいやなら出られるのもいゝだらう。然し教會を出ても、あなたは決して正しい生活の出來る人ではない。あなたが眞實の生活をしたいといふのならば、なぜもつと、あなた自身の良心に忠實に、あなた自身の眞實の生活に進まないのか。何の必要があつて教會を出るのか、批難攻撃が恐ろしくて出て行くのならば、教會を出ても同じ事ではないか。私はあなたが教會を出るといふことに少しも好意をもてぬ。教

會を出る必要もないし、さりとて勿論虚僞や妥協を爲す必要もない。あなたは現在のまゝであなたが正しいと思ふ信心の世界を開けばいゝではないか。それがためによし制裁があらうが、批難があらうと甘んじて受けて行くべきである。敢て怖るゝに足らぬではないか。あなたが、教會がどうの斯うのといふて出やうとするのは、つまりはあなた自身が、自分の生活を開かうとする勞力もなく、中心に燃ゆる信心もないからである……』と。

○

何處かによい所がなからうか、住みよい天地がありはせぬかと、求め廻つて居る人々がある。

斯んな人々は、一生涯、住みよい所を求め歩いても、つひに

出遭ふことはないであらう。天國は餘りに高くて、飛行機も間に合ふまい。西方の極樂淨土も餘りに遠くて汽車や汽船の間にも合ふまい。

己れのうちに求むることなく、たゞ何處かよき所があれば、と、人生をさすらふ者は、常に運命を頼みにしてゐるものであつて、運命を頼みにしてゐるものほど、救はれ難いものはない。信心はいつも自らを開拓してゆくものでなくてはならぬ。

○

完成された自由の世界などは何處にもない。

自由の世界は、常に自分の願ひが表現され、創造され、建設される世界でなくてはならぬ。

自由の世界は、草鞋ばきで、さがして求め得らるべきではな

くて、自分自身の内に燃ゆる信心によつて建設すべきである。
内に燃ゆる願ひのないものには、永久に自由の世界は與へられぬであらう、むしろ一生牢獄から牢獄への旅を續けねばならぬであらう。どうでもかうでも、なつてもならいでも、……と云ふ燃ゆる信念こそ、自分の世界を開拓する唯一つの道であらう。

○

滾々と湧き出づる湧井の水を、ヂツトながめてゐると、いろんな想ひがこみ上つてくる事がある。なんといふなつかしい姿であらう。何といふ尊い姿であらう。
方法もなければ、術策もない、只抑へるに抑へきれぬ、内から溢れ出る力によつて湧き出づるあの水のなつかしい姿、私は

この水の姿をあかず眺めることがある。
私共の惱みの多くは、人間的巧智をもつてこの中心より湧き出づる願望を抑へよう、妨げようとする處に起るのではあるまいか。溢れ出づる力によつて湧き出て來る水には、善もなければ、惡もない。正もなければ、邪もない。權利もなければ、義理もない。眞實の生活とは、この湧き出づる水のやうに、中心に躍動する願心そのまゝを表現する生活ではあるまいか。方法を忘れ、術策を離れて、純一に、無雜に……。

○

嘗つて私が小學校に通つてゐる私の子供に、鐵一貫目と綿一貫目とどちらが重いかと尋ねた事があつた。子供は即座に鐵が重いと答へた。私は笑つた。馬鹿な事をいふものぢやない。鐵

だつて綿だつて一貫目は一貫目だ、一貫目の重量に鐵だの綿だのと差異があるものか。それが判らねば秤にかけて見ればすぐ判ると、如何にも知つたか風に説明をした。やつと子供は得心したやうであつた。

然し今にして思ふと、私は子供の方が正しかつたのではないかと思ふ。子供は直覺から答へたのだが、私は理窟の上から説明をしたのであつた。

思ふて通へば千里も一里、逢はずに歸れば又千里といふ俗謠がある。鐵の一貫目と綿の一貫目と一つぢやと、言ひ張つた私は、思ふて通つたとて逢はずに歸つたとて、千里は千里、一里は一里であるべき筈である。

然し深く私の内心の眞實に問ふてみると、思ふて通ふた道は

近く、落膽して歸る道は遠いのである。

時間にしても亦同じ事が言へる。

愉快に仕事をしてゐる時は、時間が短いが、不愉快に仕事をしてゐる時は時間が長い。

○

感激は時間を短くし、里程を短縮し、重量を輕減する。倦怠は時間を長くし、里程を延長し、重量を重からしめる。

○

事實思ひのこもつてゐる時は、道も近く、時間も短く、荷物も輕い。我物と思へば輕し傘の雪……といふ句もある。然し思ひのこもつてゐない時ほど道は遠く、時間は長く、荷物の重く感ずることは無い。

○

勞働問題を、單に賃金や時間といふやうな外的な問題のみによつて、これを決定せんとする事は、まことに眞實に遠い方法であつて、その奥に潛む心の問題にまで觸れるべきである。

資本家は自分の仕事をさせてゐると思ふてゐるから、勞働者は他人の仕事をしてゐると思ふてゐる。能率の上らぬのに何の不思議もない。懸け引きのなくならないのに、何の不思議があらう。

○

自覺は人間の魂の叫びである。

自覺の無い人々が寄つて、何をした處で本當な解決のつきさうな筈がない。人々が魂に目ざめて來ることによつて、始めて

一切の解決がつくものである。

歡喜の世界が開かれ、自由の世界が開拓されるのである。

○

私は昨年から今年にかけてめづらしく病臥してゐた。病室の入口には『面會お斷り』の紙片さへ貼られてあつた。病室にあてゝあつた二階の六疊の部屋の窓から見えるものは、大空に動く雲の流れと、二、三本の雜木の梢とであつたが、それによつてどれだけ大きな慰めを與へられたことか知れない。又枕頭に友人より贈られた二、三莖の草花によつて、私はどれほど深い自然の恩惠を感じたか知れない。

そしてそれらの自然から與へられた心の和らぎが、いかに私の身と心の痛みを癒すに役立つたことか知れぬ。

自然は何んにも語つてくれぬが、私達に恵むものは大きい。

○

病める私の心にかくも大きな和らぎを與へてくれた。雲の流れも、雑木の梢も、實用的には何の役に立つものでもない。材木としては恐らく何ものにも使用出來ないのみか、或は薪にすらならないであらう。

枕頭の小壺に挿された數種の草花も、その多くは野に咲く雑草の類であつて、常には何の役にも立たず、多くの人々から多くの場合、無視されがちのものである。

しかもそれらの所謂無用の存在が、私の病める心に、如何に多くの和らぎと希望を與へてくれたか。

腹の減つた時に食ふ食物のみが、人間の健康を維持してゐるのではない。熱のある時に飲む熱さましの藥のやうな作用のみが、人間を健康に生かす力とは云へない。

○

何の役にも立たないやうに思へる雑草ばかりの草原が、私達みづから氣づかない間に、いかに甚大に、人類の健康と成長とに寄與して來たことか、又現にしつゝあるかを、私達はもつと深く考へて見る必要があると思ふ。

文藝や藝術が何の役に立つか……と、藥の効能でも實驗するやうな態度で扱はれることは、心もとないことである。

山を見れば、山はいつも私に安らかな快い感じを與へてくれる。田園をながむれば、田園はいつも私をいゝ氣持にしてくれる。

毎日のやうに見慣れてゐる山ではあるが、日毎にながめてゐる田園ではあるが、その度毎に新たな感じを與へてくれる。山も野もあくことを知らぬ。

なぜさうなのか。沈默の自然に聞くよしもない。

然したゞ私達は自然から離れては、生活することが出來ない事だけは事實である。

○

人間中心の興味……私にもかうした事が判らぬでもない。勿論否定しようとは思はぬ。然し所謂活動家が、

『自然に親しむなんてことは、閑人の閑事業さ』

などゝ平氣で云はれるほどに、私は自然に對して忘恩的にはなり得ない。

美しい自然に見とれて、ぼんやりと過ごした時間、それは果してそんなに空虛な時間であらうか、それをさう感じるやうな人の生活に、果して眞の充實があるのだらうか。

すべてを功利的な見地から處理しようとすることは恐ろしいことである。

○

宮崎の友人から、早出の胡瓜をもらふてフトこんなことを思ふた。

日本人にとつて、農産物ほど貴いものはない。それにもかゝはらず、日本人ほど農産物を輕視する國民は、あまり無いのではあるまいか。他の國民のことは知らぬが、少くとも日本人は農産物を輕視し過ぎてゐるやうに思ふ。

百姓が瓜や茄子を手土産に持つて來る。かうした場合、多くの人々は、ナンダ瓜か、茄子か、……といふやうな心持から、直ちに金錢に評價して、あまり有難く思はない。これほど不愉快な氣持はない。然もこの不愉快な氣持が、相當に日本人にはもち合はせてゐるのではあるまいか。

茄子一つ、胡瓜一本でも、農民にとつてはそれは血と汗の結晶である。ありあまる時間の餘裕をもつた人々の閑つぶしに培養した代物とはわけが違ふ。

道樂に作つたトマトなんかを貰つたりすると、馬鹿に喜んで『まことに見事なものを頂きまして』

とか何とか云つて、お禮を述べるくせに、農民が血と汗で練り固めた、茄子や胡瓜なんかを持つて來てくれても、さほど有

難い心持をもち得ない。

あまりにも大きい矛盾である。

農村の經濟行政も大切だが、もつと〳〵本氣で、農作物を尊重する心持が深まらなければ、本當に農民の向上も、農村の發展もむつかしいのではあるまいか。

○

嘗つて同志と山に登つたことがあつた。

到るところに名も知らぬ美しい花が咲いてゐた。そして如何な名畫伯の筆も及ばぬ、つや〳〵しい色の草木が、無雜作に茂つてゐた。

それらの美しい木も、草も無言でした。私達がその美しい姿を見ようが見まいが、そんなことには無頓着に花を咲かせ、葉

を茂らせてゐるやうであつた。

でも私達は、そんなに美しい色や、愛らしい形の花に出會ひながら、心なしに通り過ぎる事が出來なかつた。いたづらに見過すことが相濟まぬやうな氣さへした。出來るだけ深く、出來るだけ心をとめて語らねばならぬやうな愛着さへ感じた。

勿論、それらの花や木を、痛々しくも折り取つてもつて歸る氣には尙更なれなかつた。

山を下つてから、振り返り仰ぎ見た時、私は全體としての、雄大な山の姿の美に打たれるばかりではなく、もつと親しみのある、こまやかな、なつかしさを感ぜぬわけにはゆかなかつた。

そこに生き、そこに死ぬ、無言の美しい花、そしてもう私達

の生涯には、再び會ふことのない木や草に對する斷ち難い愛着をも加はつて。

○

このあひだ、學校の先輩で、書を良くする人が來た。その人の話に、

磨り足りない墨のうすさと、充分磨つた墨を水でうすめたうすさとは、雲泥の相違があるといふことを語つて聞かせてくれた。

磨り足りない墨の不愉快さ、それに引きかへて充分に磨り上げた墨を、水でうすめて調節した墨色の美しさ……。

このことは、生活の上にも云ふ事が出來る。練れるだけ練れといふことは、人間になるためには最も大切な事である。生活

の表現がどうの、かうのといふのはそれからの事である。

人間は生活の表現がどうであらうと、兎に角拔け切る事が大切である。拔け切つた人間には盡きせぬ味がある。

○

夏は不思議に私には魅力的なものである。

お盆が來ると、きまつたやうに、無心な幼年時代に遊び廻つたふるさとの事が思ひ出されて來る。

ふるさとの山川草木は、ことゞく有情の舊友のやうになつかしい思ひ出を語つてくれる。そして限り無き愛と惠みにつゝまれた溫い夢の世界にまで誘ひ入れてくれる。

ふるさとの思ひ出ほどなつかしいものはない。

ふるさとの山川草木にはたしかに聲がある、道端にころがる

石ころまで涙がある。ふるさとほど深い愛と叡智の所有者はない。

○

人間は誰れでもふるさとをもつてゐる。ふるさとをもたぬ人間は一人もない。

然しふるさとを忘れてゐる人は多い。私もその一人である。

然し忘れてゐるのはまだいゝ、思ひ出す日があるから。中には失つて仕舞つてゐるのではないかと思ふ人々さへある。恐らくこの地上に住める人間のうちで、ふるさとを失ふた人間ほど不幸なものはあるまい。

○

一たび人間がふるさとを出ると、いつのまにやら利己的にな

つて、はぢも外聞も忘れ、たゞ己れの世界のみ造らうとする。物質文明や、機械文明のみをめざして進む、黄金さへあれば、どんな享樂の生活も出來ると考へる。

その結果、機械文明は盛んになるが、機械を使用しない者は落伍する、つひには人間が使ふ筈であつた機械に、人間が使はれる樣になつてしまふ。

物質文明が盛んになつたおかげで、資本主義制度の機構が生れ、人々はその機構のなかにまきこまれて仕舞ふ。

尊い魂の生活が失はれて、人間までも機械になつて仕舞ふ。

世の中はむやみに忙しくなるばかりで、不幸と不安の波が、ます〳〵高くなつてくる。

ふるさとを失ふた人々には、黄金のみがたよりである。山川

も、草木も何の語らひもない、自然もたゞ一個の物であつて何の心もない。

○

學生の頃、田部重治さんからであつたか、オーガスチンの懺悔錄をすゝめられて讀んだ事があつた。

彼は人間の生くべき道について、眞劍に考へ苦しんだ。そしてさすらひの旅に出た。つひに彼はふるさとに歸つた時、人間は魂のふるさとに住居を定めるまでは、斷じて安住し得るものでないといふ事を告白してゐた。

○

T君は、きたない財布の底から、五拾圓の金を取り出して、先生このお金は私が働いて貯めたお金です。何かのお役に立て

て下さい、といつて出された。私は貧しいT君からこんな大金を戴かうとは夢つゆ思つてゐなかつた。

T君は更に語をつゞけて、去年の丁度今月の今日、先生のお蔭で助けて頂きました、今年はこんなに働かせて頂けて、どんなに感謝していゝか判りません。

T君の兩眼には涙が宿つてゐた。

○

神にもたれると云ふが、もたれるといふ事は、單なる依頼心であつてはならぬ。人事の限りをつくして、しかる後に神様におまかせするといふのが、神様にもたれるといふのではあるまいか。

人事の限りを盡して神様におまかせする、この境地には悔ひ

もなければ失望もない、不滿もなければ不平もない。

人事の限りを盡さゞりし時にのみ悔ひが生じ、神にも任せ切れず、人だのみで都合のいゝ結果を豫想し、豫想を裏切られた る結果を見たる時に不平が生じ、不滿が生まれる。

○

金に不自由せる人より戴く金は實に尊い、金に不自由せる人に上げる金は實にうれしい。不自由を知らぬ人の金、不自由のない人に上げる金、共に價少し。

T君に出した金は實にうれしかつたが、T君よりの五拾圓も亦實に有難かつた。

私が働いていたゞいたお金ですから、心おきなく使つてくださいと云つて五拾圓を差出した。T君の眼には涙が宿つてゐた

が、それを戴く私の胸にも涙が一ぱいだつた。

○

彼女は八百屋へ果物を買ひに行つた。果物を受取つて代金を支拂ふ時に、丁寧に有難う御座いましたとお禮を述べた。勿論八百屋の主人も、丁寧に有難う存じましたとお禮を述べた。

互に有難う御座いましたと、お禮の挨拶を述べ合ふ情景を見るほど、和らいだ氣分に浸るものはない。

錢さへ出せば吾々はお客だ、何んの遠慮などする必要があるものか……などゝ云ふ人のあるのは、實に淋しい思ひがする。こんな氣持で生活する人は、何んでもないやうであるが、實は非常に大きな損失をしてゐるのではないかと思ふ。

代金さへ支拂へば品物を受取るのは當然の權利だといふ、そ

りやその通りである。決して間違つてゐるとは云はぬ。然し斯うも考へる事は出來ないだらうか。

拂ふから權利があるといふ考へ方ではなしに、自分のほしいものを貰ふのだ、だからその感謝のしるしとして代金を受取つて貰ふのである……と云ふ風な思ひ方で暮したら、同じ生活をしてゐながら、どれほど和らいだ明るい氣持で一日を過し得るであらうか。斯う考へるのは決して私一人ではあるまい。

代價さへ支拂へば受取るのが當然であるといふ、冷たい權利と義務の世界のみに生きてゐる人の生活ほど、味の無いものはあるまい。

物はどんな物でも、それを手にする人の心持一つで死んだり生きたりする。

○

悪を爲すといふ事がいゝ事でないのは、今更云ふ必要もない。然し一度悪を犯したらもう再び浮ぶ瀬はないと云ふ考へ方はどうかと思ふ。

世間には斯ういふかんがへ方をする人々も可也あるやうであるが、これはどうだらう。

人間といふものは弱いものだから、フトした機會から、後で考へて見ると、どうしてあの時あんな事をしたのかしらんと云ふやうな事がよくあるものである。それを唯一のせめ道具として、あんな事をした奴は、斯んな事をした奴はと、いつまでも非難をする事はまことに恐ろしい事である。

前科などある人に對しても、こんな見方をする人が可也ある

やうだが、これは慎みたいと思ふ。斯うした絶望的な考へ方が、救はれ得ざるものにして仕舞ふ事がある。

悪に對する考へ方は明瞭でなくてはいけないと思ふし、又いくら悪事をしたからとて、さんげさへすればこれでお仕舞ひだといふ風な考へ方もよくないとは思ふが、一度犯した悪を、いつまでもいつまでも非難し、救ひ得ざるものと考へる事が、まことに恐ろしい事である。

悪い事は二たび犯すまいと、斯う自覺決心する心持は、實に尊いと思ふ。眞のさんげといふものは、私は悪い事をいたしまして、誠に相濟みませんと、過去に犯した行爲をわびるだけではなく、これを再び繰り返さないといふ將來への自覺が一層大切だと思ふ。こゝにさんげの尊さがある。

節から芽を出す……と申された教祖様の言葉の中には、斯うした意味があるのではあるまいか。

恐ろしいのは、もう一たび悪事を爲したのだから、浮ぶ事は出來ない、一たび、ひつくり返した盆の水は、再び元に返す事は出來ないのだ……といふ自棄的な考へ方である。

私はむしろ、俺はまだ一度も悪事を犯した事がないと、自惚れてゐる人よりは、むしろ犯した悪事に對して、眞にさんげ、轉心の心持をもつてゐる人の方が尊いやうに思ふ。

本當のさんげといふものは、即刻改めるものでなくては嘘だと思ふ。いつかいゝ機會にとか、來年からとか、明日からとかいふのは皆嘘である。少くとも眞のさんげではない。今直ちにでなくてはならない。

水に入るといふ事と、ぬれるといふ事とが同時である樣に、さんげと生活との間に、時間的に些かの隙もあつてはならぬと思ふ。

○

悪事はよくない。然し一度犯した悪事を絶望的に考へることは更によくない。

○

彼はほんたうに信心がきらひであつた。自分の最愛の妻が、天理教に入信したといふ事を打明けた時でも、烈火の如く叱りつけた。

それとも尙入信するのならば、離婚してやると斷乎として云ひ放つた。

其の後その妻君が不幸にして病氣になつた。彼は早速阪大の病院に入院せしめて充分に看護をした。それにもかゝはらず病勢は快方に向はず、一日々々進んだ。遂に醫長某博士は彼に絶望を宣告した。

彼としては人事の限りを盡したのだから、もう悔ひはない筈である。

然るに彼は、賴りになる某博士にさじを投げられてしまつてたまらなくなつたのであらう、時間もかまはず私の處に夜中おそく飛んで來て、どうか神樣にお願ひしてくれと泣いて賴んだ。

勿論、依賴さるゝまゝに、私は彼と共に心から神樣に祈願をこめた。然しその翌朝、最愛の妻は歸らぬ旅路に出てしまつ

た。

彼女の入信を許さなかつたから死んだのでもない。勿論病院に入院せしめたから死んだのでもない。人事の限りを盡していけなかつたのだから、彼女としてはもうそれまでの運命であつたのであらう。

然しこれによつて私の學ばされた事は、信心をもたぬものは特に信心のない男は餘裕のある間は、强さうな事を云つてはゐるが、さてせつぱつまつてみると、實に弱いものであるといふ事を沁々思はせられた。信心をもつものは、平素は弱さうに見える事があつても、いざ鎌倉といふ時には、なか〳〵落ちついたものである。

病氣が癒るとか癒らぬとか云ふ事が、信心の利益ではなくて

いざ鎌倉といふ場合に、信心の利益といふものが、その態度の上に、あまりにもはつきり現はれるものであるといふ事を、沁沁感じさせられた。

○

私の父はやがて年が明けると八十五歳である。耳も大分遠い物忘れもなか〳〵上手である。そして口癖のやうに、私はもう老ひぼれて役に立たぬと云はるゝ。

私は父に云つた。

役に立たぬどころぢやない、あなたでなくてはならぬ大きな仕事があると。

それはどんな仕事かと問はるゝので私は語つた。

お父さん、あなたはもういゝ年寄りなのだから、何んにもし

なくてもよろしい。あなたがうろ〳〵すると皆が心配をする。その代りに、火鉢の傍で寒くないやうにして、好きな茶でも頂きながら、來られた信徒の方々に、又出入せられる商人にも、同じ詰所に住むものに、人の顔さへ見たら『御苦勞さまやナ』と一言だけ云ひなさい。どんな人でも『御苦勞さま』と云はれて腹を立てる人はない、矢張り御苦勞樣と答へるに相違ない。

あなたが一日に十人の人に『御苦勞さま』と云へば、あなたは十人の方から『御苦勞さま』と御禮を云はるゝのです。こんな大きい仕事はありません……と。

宗教だの道德だのと、むつかしい理窟をならべてみても、結局は、人間と人間とが互に御苦勞さま、と感謝し合へる生活を望んでゐるのである。家庭の平和も、國家の平和も、社會の平

和も互ひに人と人とが『御苦勞さま』と感謝し合ふことによつて實現出來るのである。

それを思ふと、あなたが人の顏さへ見れば『御苦勞さまです ナ』と云はるゝ事がどんなに大きな仕事であるか知れません。

○

心の持ち方が大切だといふ事を、よく聞かされもし、語りもして來たが、その心の持ち方をよくしやうとするのにはどうしても、生活を良くしないと、心の持ち方が良くなつて來ないやうに思ふ。

信心は心の問題だと思ふてゐたが、信心は生活の問題ではないかといふやうな考へ方さへ起つて來た。

○

人からものを借りてゐて、それを返しもしないで、返して仕舞つたやうなすが〳〵した心持になれと云つたところで、決してなれるものではない。それを返して仕舞つた時に、自ら心がすが〳〵しくなるものである。

○

朝寢をすると一日中何とはなしに氣持が良くない。良い氣持にならねばならぬと努めて見ても、なか〳〵それが出來ぬ。然し早起きをすると、それほどよい心持にならうと努力しないでも、何とはなしに心が清々しくなるものである。

○

心を調べやうとするには

生活を調べる事が先決である。

○

よい心持になりたいと願はぬ人はないやうに思ふが、よい生活をしなければならぬと思ふ人は、比較的少いやうに思ふ。矛盾も甚だしい。これほど無理な註文はあるまい。

○

身をもつて祈るといふ言葉を聞いたことがあるが、これがほんたうの信心の姿だと思ふ。

手を合はして祈るだけではなく

心で祈るだけではなく

生活全體で祈るのでなくては、本當の祈りではあるまい。

○

自分の信心の中身を見たいと思ふた時は、自分の生活を反省

するのが一番早くて確かである。

信じるといふ事と

頼るといふ事とはまことに混同され易い。

私はあの人を信じてこれ〳〵の事を頼んだが、それにしてくれなかつた。私は信じてゐたのに、すつかり裏切られて仕舞つた。もうあの人を信じることが出來ない、などゝいふ言葉をよく聞く。

相手に何か自らの望み通りの事をして貰ひ度いと頼むやうな事を、信ずると思ふのは大きな誤りである。

それは頼るといふことであり、利用するといふものであつて、さういふ心持には裏切られるといふやうな事も起つて來るであらう。

○

信ずるといふ事には、斷じて裏切られるといふ事はない。それは先方に、こちらの望み通り動いて貰はうとするのではなくて、こちらが先方の意志の通りに動き度いと思ふからである。自分の通り方や、勤め方にもどかしさを感じても、相手に裏切られるなどゝ云ふ事はあらう筈がない。

○

たよらうとしたり、利用しようとしたり、何か自分の方に求めるものがある時は、どうしても、駈引きや術策が起つてくる。どうしたら相手が動いてくれるだらうか。どう仕向けたら、こちらの思ひ通りになるだらうかと考へてゐる間は、憎んでみたり、失望したりすることがある。而し、信ずるといふ事

には、さうした憎しみも、失望も、不平も起らう筈がない。

○

信ずるといふ働きの中に、利用するといふ風な事が些かでもあつてはならぬ。

いつも陽氣である。すが〳〵してゐる。

あの人を信ずるといふ事は、その人の生き方が本當のものであるといふ事を認め、それ〴〵に感じて、自分もさういふ生き方をしようとすることである。

○

信ずるといふ事は、先方のまことを信ずるのである。先方のまことゝ、こちらのまことゝが行き合つてゐるのが信ずるといふ事で、それ以外に先方から何かして貰はうの、どうして貰は

うのといふのではない。

だから何百年、何千年前の人でも信ずる事が出來、何萬里、何千里離れてゐる人でも、また一度も會つた事もなく、話したこともない人でも信ずる事が出來る。

何かして貰はうと考へたり、何か利用しようとするのであつたら、そんな何千年も前の人や、何千里も離れてゐる人、一度も合つた事も、話した事もない人をどうして信じられやう。

信ずるといふ事は先方のまことを認め、それにこちらが感動する事であるから、それが出來るのである。

○

それでは信心の利益といふものがないではないかと云ふ人があるなら、私はかう答へたい。

信心ほど大きい利益を頂くものは他に絶對にない。なぜかと云へば、先方のまことによつて、こちらのまことを生かして貰ひ、目醒まして貰ふのであるから、恐らくこれほど確かなもの、これほど貴いもの、これほど有難いもの、これほどよいものを、信心の外に何處で頂けるであらう。

世に利益もいろ〳〵あらうが、信心より頂く利益ほど大きい確かなものは他にない。

○

自分のまことが、これ迄よりもよい具合に生き〳〵と働き、しつかりとした働きをするやうにさへならされたら、今迄迷ふたり、苦しんだり、腹立てたり、失望したりしてゐたいろ〳〵の事が、次から次へみな解決して仕舞ふのであるから、どれほ

どお金を貰ふよりも、どんな高位高官の位を貰ふよりも有難い確かなものである。

○

信ずるといふことは、先方のまことを認め、それに順應するのであるから、こちらの方にもまことの心が動き出してゐる。それが有難いのである。こちらにまことが動いて來なかつたら、先方だけにいくらまことがあつても、何んにもならぬ。先方のまことを認めると共に、こちらのまことが働いてくるので信心は有難いのである。

○

この世に信ずる人のあるといふ事は、どんなに有難い事か知れない。

信じさせて下さる。

まことを奮ひ起させて下さる。

その事が何より尊い、有難い贈り物を頂いてゐるのである。

數多い贈り物のうちでこんな貴いものはもう一つとあるまい。

○

信心といふ事は、神様に手を合はして拜む事である。佛様に禮拜することであると云へば、中には、或は私は信心などする必要はないと云ふ人があるかも知れぬ。

然し信心といふことは、自分の生活を調べ、自分の心の持ち方を良くし、そして生活全體をよい方向に導かれる事であると云ふならば、誰れでも、信心など必要でないといひ得る人は一人もあるまい。

○

日々常々と云ふことを強調せられた教祖様のお教へが、この上もなく有難い心持がする。信心は日常の生活の中にあるのである。毎日々々の生活から離れて、信心のありやう筈はない。

○

たつた一本のむし歯が痛んでさへ、一晩中寝られぬと云ふことは決して不思議な事ではない。歯の悪い私には幾度となく經驗した事である。身體中の何處が痛んでも、全體にその痛みを感ずる。

五本の指、どの指嚙んでも、同じやうに痛からうと教祖様は教へられたといふことである。

國家、社會……の事を考へても同じことである。私達の一念、私達の一行は、悉くそのまゝに全體の上に響き合ふてゐるのである。

このことを嚴肅に考へる時、われ〳〵はわれの爲の吾ではなくて、全體の一部としての吾である事を悟り得る。

○

私が見込んで私がほれて、私が苦勞すりや自由の權……なぞといふ歌があるやうだが、私は訂正する必要があると思ふ。

眞の生活といふものは、己れ一個の爲の生活ではなくて、全體の一部としてのその用を完うする生活でなくてはならぬ。

○

天地は一軒の家である。

一枚の瓦をはがれても雨はもる、屋根は腐る。ましてや一本の柱を抜かれては、やがてその家は崩れて仕舞ふ。

○

宇宙は一個の肉體である。

肉眼で見えぬやうな小さい埃が目にはいつても、涙が出て困る、ものを視るに不自由を感ずる。たつた一本の齒が拔けても、ものが食べにくい、ものが云ひ難い。

お日様のお照しが一時間でもなかつたらどうなるだらう。

お水がたつた一時間でも、地上から湧き出なかつたらどうなるだらう。

空氣がたつた一時間でも、この地上から消え去つて仕舞つたらどうなるだらう。

想像するだに恐ろしい世界と化するであらう。

植物の一本も生えない世界。

女ばかりで男のゐない世界。

男ばかりで女のゐない世界。

を想像したらどうであらう。

動物の排出する糞尿や、炭酸瓦斯は植物にはなくてはならぬ滋養物であり、植物が排出する酸素は、動物にはなくてはならぬ生活素である。

互ひに立て合ひ助け合ひは宇宙の原則である。天も、地も、人も、動物も、植物も、一切のものが互ひに立て合ひ助け合ふて、一個體を形成してゐるのが宇宙である。

宇宙は事實に於て生きてゐる。呼吸をしてゐる。そして歩み

つゞけてゐる。

これを悟るとき、私達は我儘であつてはならぬ。利己的であつてはならぬ。

絶えず、己れを省み、自らを慎み、自分と他の一切の關係を深く思はねばならぬ。

それ〴〵の柱に、それ〴〵の重みを持たしてある事を悟る時自分一人の行爲と思はるゝことにも、重大な責任を感じなければならぬ。

○

天地一切のもの、又人間各自、それ〴〵異つた特質と機能とを持つてゐる。一切を自己の如くあらしめんとする事は僭越である。無智である。

導き育てるといふ事は大切な事である。

然し導き育てる事と、己れの型に强制することゝはまことに混同され易い。前者は相手を基調として、後者は己れを基調とする。

導くといふ事は、相手の本性に從ふて、覺まし、伸ばし、引き出すことである。强ひるといふことは、相手の本性を無視して徒らに己れの欲する鑄型に、はめようとすることである。

○

與へる者がどんなにいゝものだと信じてゐても、相手に必要でないものを與へる事は賢明とは云へぬ。

猫にはかつをぶしを與へるがいゝ。

豚には殘飯を與へるのがいゝ。

小判や眞珠が、如何にいゝものであり、高價なものであらうと彼等には何の價値もない。むしろ迷惑千萬であらう。

○

自分だけが正しい。自分に合はぬものはみな間違つてゐると考へる道學者流が可也多い。

斯かる人には、他を導く資格はないと云ひ得る。かゝる人は自己以外の一切を否定し、排除せんとする傾向があるからである。自己の如くある者は愛するが、自己の如くあらざるものを憎むことはよくない事である。

○

表面、如何にも君子人であり、善人であるかの如く見える人の中にも、案外狹量で排他的な人があると同時に、その反對に

惡人のやうに云はれてゐる人の中に、なか〳〵善い人を見出す場合が相當にある。

前者は己の身に鎧をつけて、城の中で自己を守ることに汲々たる人に多く、後者は鎧もなく、城もなく、本當に素つ裸で、血と、涙と、汗の山河を渉つて來たものに多い。

前者の領土は限られてゐるが、後者の領土は無限である。地上にある全てのものは、神が許されてゐる故に存在するのである。小さい自己を基調として判斷する事は誠に危險である。眞の愛の所有者は廣い世界に住むものでなくてはならぬ。

○

人間である限り、美を求め、平和と幸福とを願はぬものはあるまい。

善人と云はれても、悪人と云はれても、奥底の眞性には判然と善悪の別な世界があるのではあるまい。ホンの一寸した心得違ひから、いろ〳〵なものに蔽はれて、善と見え悪と思はれてゐるのである。

泥棒をしたり、人殺しをしたりする時は、鬼であるかも知れぬ。悪魔であるかも知れぬ。然し芯からの鬼でもなく、悪魔でもない。必ず奥底では慄へてゐる。泣いてゐる。恥ぢてゐるに相違ないと思ふ。

人間は神の子であり、靈性は神の分けみたまである。教育や宗教にたづさはるものは、このことを知ることが何よりも大切であると思ふ。

○

天地一切に對する考へといふことを沁々思はねばならぬ。眞に心の底からこの事を思ふ時、人も、物も損ふ事は出來ぬ。一切をそれ〴〵活かさねばならぬことゝ思ふ。

どんなものに對してゞも、感謝の念が湧く。馬鹿にしてはならぬといふ氣が起こる。

けれども多くの場合、表面的に動いてゐる時には、どうしても直接の利害にとらはれ、大局を見失ふ事が多い。

天地一切に對する感謝と報恩を忘れ勝ちである。

自分の都合のいゝものだけを愛するやうな、身勝手な態度をとる事が多い。

天地一切からの御恩を知らぬ間は、どんなに才能があり、權勢があつても、神様からは遠い處に立つてゐる。他に對して恨

み、ねたみ、呪ひのある間は、決して神の方に向つて進むことは出來ぬ。

○

世界は大きい。

自己は小さい。

然し小さい自己も亦大きい世界の一部である。世界の大きな立場から、自己をみつめる事を怠つてはならぬ。小さい自己の立場から大きなものを見る事は誤りである。

神の意志と、世界の大きい立場からそれ〴〵をみつめ、それぞれを活かすことが何よりも大切なことではあるまいか。

○

新聞や雜誌を讀む毎に、よくもこんなに問題があるものだと

感心する事がある。實に人生は問題の連續であるとも云へる。

吾々の生活から問題がなくなるといふ事は、恐らく永久にあるまい。自分自身の身の上に問題がなくとも、どうにかしてやらねばならぬ問題が、身内のものや知つた人達の間に起こるものである。身内のものや、知つた人達の間に問題がなくとも、自分が擔ひ立たねばならぬ問題が、國家の上に、或は社會の上にと、次から次へと起こるものである。

それが生ける人生の約束であらう……。

○

如何なる問題が起こつても、その問題を解決する鍵さへあれば安心である。問題を解決する鍵を持たずに、人生をわたるほど、無謀な、そして危險なことはあるまい。

問題を解く鍵、そんなものがあるであらうか……、それを見付けて、自分の手に入れること……、これほど吾々が世に處して行くに大切な事はあるまい。人間が修業するといふ事はこの鍵を手に入れる努力をいふのではあるまいか？。

○

極樂の世界には、或は問題がないかも知れん、そのかはり恐らく退屈でとても辛抱が出來ないであらうと思はれる。御馳走と、美しいものと、立派なものとで不自由のないといふやうな處では、しばらくは良いかも知れないが、決して永い間居れるものではない。遊ぶことは樂しみであるかも知れんが、仕事のあることは更に樂しみである。仕事のない生活ほど、退屈な、苦しい、不幸な生活は恐らくあるまい。

○

極樂の世界へ旅行して來た聖人の話を聽くと、

〃極樂の世界ほどいゝ處はあるまい、極樂の世界へ行つたら其處を永住の地と定めやうと思つて、實は非常な期待をもつて行つてみたのだが、なるほど、行つて見ると綺麗な處には相違なかつたが、誰もゐない。人間は埃の多いものだから、大方地獄の方へ廻されたので、極樂の方へ來る人は極めて少いのであらうとは思つてゐた。それにしても、孔子や、孟子や、釋迦や、キリストは勿論、口癖のやうに、極樂を讃美し續けて來た法然上人や、親鸞上人などはきつと、おいでになるに相違ないと思つて、あちらこちらと捜して見たが、一向に見當らない。これはどうしたのかと極樂の番人に聞いて見た處が「それは確かに

おいでになりましたが、然しほんの二、三日おいでになつただけで、又何處かへお出掛けになつて仕舞ひまして、それつきりお歸りになりません。只今では、どなたもおいでにならぬ」といふ事であつた。私は不思議でなりませんので、その理由を尋ねて見ましたところが「遊ぶことばかりで、仕事が一つもない。仕事のないほど苦しい退屈なことはない。とてもこんな處では、永居は出來ないと仰有つて、次から次へと出て行つて仕舞はれまして、今ではどなたも殘つておいでにならないのです……」〃

との事である。

『何處に行かれました』ときいたら『多分地獄の方ぢやないかと思ひます』と云ふことであつた。『それはこんなに云つてお出掛けになりましたから』と番人は話を續けた。

『地獄の方にはいろ〳〵な問題で苦しんでゐる人が隨分澤山ゐる筈だ、そんな人々と共に暮して、少しでも慰め、助けて上げる方が、どんなに樂しいか知れない、矢張り問題のある世界の方が樂しくて、愉快だなど〻申されてをりましたから……恐らく地獄の方へ行かれたに相違ないと思ふのです……』と。

私も折角あこがれて極樂の世界へ旅をいたしましたが、それを聞いてなるほど〻思ひ、又『地獄から引返して來た』と云ふのであります。

趣きの深い話だと思ひます。

○

教祖樣は、此處はこの世の極樂や、と、この問題のたえざる現實の世界を極樂だと申された事は、まことに穿つたお言葉で

あると思ふ。

○

身上事情は道の花、であると私達は教へられました。恐らく人の世に身上事情ほどにが〳〵しくも、いたましきものはありますまい。それが何故に花であらう。

○

人間の一番尊い、一番輝かしいものは、努力であります。努力は問題を解決しようとする處に起こるのである。問題のないところには努力の必要はない。努力のない生活は死んでも生活であり、問題のない社會は死せる社會である……とも云ひ得る。

○

問題のみ續いて、その問題を解決し得ないほど苦しい事はあるまい。問題に惱み、問題に苦しみながら、その問題が起こつて來る根本が判らず、從つて問題を解決する道筋も判らないでたゞ憂鬱にとざゝれて、溜め息のみついてゐるのが、現在社會の生活の實相ではあるまいか。

○

問題の解決に苦しむ時、多くの場合、その原因が相手にある如く思ふのである。社會が悪い、時勢が悪い、制度が悪い、國家が悪い、親が悪い、子が悪い、主人が悪い、主婦が悪い、雇主が悪い、使用人が悪い、只相手の悪いことのみを思ふて、それをせめ、それをとがめるのである。斯うした考へ方、見方、解決の仕方では到底本當の解決の出來さうな筈はない。

どんなに傷を受けても、受けるところに依つては、三十四ケ所の刀傷も、生命には別條ありませんが、針一本でも命をうばふ急所もあります。

○

問題を解決するにも急所がある。

中心は急所である。

如何に努力をしても、急所をはづしては勞のみ多くして、功が少い。中心を失ふては〝しんどうのしぞん〟に終る。

○

問題を解決する鍵は各人の心の中に在る。

魂のうちにひそんでゐる。

總て人には急所があり、ものには中心がある。しかし何處が

急所やら、何處が中心やら、それを極める人は實に少いのであります。

○

私達お道のものは、教祖樣の魂に照らされた時、始めて急所も中心もはつきり分る。天の心に照らされた時、各々の心の底にひそんでゐる急所がはつきり見えて來る。

苦惱に滿たされた現實の世界も、急所――苦惱を解く鍵を握つた時、始めて現實の世界が極樂の世界である、と云ふ言葉にうなづかれるのである。

私達の願ひは、問題のない西方十萬億土の極樂の世界を希ふのではなくて、問題の絶えざる現實の世界に、極樂を發見したいのである。

極樂の扉を開く鍵は、すでに百年前より教祖様によつて示されてゐる。教祖五十年の生ける雛形の生涯は、この鍵を全人類に渡したいの一念であつたのである。あの貧のどん底にありながら、あの周圍からの無理解な非難と攻撃のたゞ中にありながら、いつも陽氣に感謝と報恩の心に燃え切られた教祖様の生涯を想ふとき、一切の問題を解く鍵が何處にあるかゞ悟り得るのである。

○

ある處で御馳走になつた。新しい割箸から妻楊子に卷いた占ひが一枚出て來た。何が書いてあるかと開いて見ると、

俗謠一首。

つかへば減るもの千兩小判

減らぬは互ひの實と實

本當にいゝ歌だと思つた。

○

全ての人間が願求してやまぬものは、陽氣な明るい生活であります。

教祖様の申された、

陽氣暮しとはどんな事か。

よいものを視、よいものを聽き、よいことを語り、よいことを爲す生活である。

○

人間の身體は實に不可思議である。

いくら、この眼でよいものを見ても、決してこの眼は減るも

のではない。一度使へば減り、二度用ふれば減るといふやうなものではない。

むしろこの眼でいゝものを見れば見るほどいゝものが眼につき、いゝものが益〻視えるやうになつて來るのである。仕舞ひには、いゝものばかりが眼に視えるやうになつて來るものである。その反對に悪いものをみると、次から次へと悪いものが眼にうつり、眼に視えるやうになつて來て、仕舞ひには視るものの總てが悪いものになつて仕舞ふ。

○

いくらこの眼は使ふても、減りはせぬが、いゝものを視るやうにすれば、いくらでもいゝものが視え、悪いものを視るくせがつくと、見るもの〳〵が悪いものばかりになつて來る。

同じ眼をもつてゐながらいゝものばかりを視る人の幸福と、悪いものばかりを視る人の不幸とは天地の相違がある。

これは眼ばかりではない。耳も同じ事である。いゝ事を聽くことに努力する人は、だん〳〵いゝ事を多く聽けるやうになつて來て、仕舞ひには、聽く事すべてがよくなつて來る。ことごとく神の聲のやうに聽えて來る。

○

然し悪い事を聽くやうに慣らされてゐる人は、悪い事ばかりが聽えて來る。まるで耳は不足と、不平を聽く道具のやうになつて仕舞ふ。

口も亦同じ事である。

善い事を語らうとする人は、いくらでもいゝことを語り、い

くらいゝ事を語つても、口が減るものでもなければ、言葉が無くなるものでもない。次から次へと善い言葉が生まれ、いゝ事が語られるのに、悪い事を云ふ習慣の人は、年中、語れば悪いことを語つてゐる。不足をいふか、不平を云ふか、悪口を並べるか、口から出る言葉ことゞくが悪いことばかりになつてしまふ。

眼や、耳や、口だけではない、手でも、足でも同じことである。いくらいゝ仕事をしても、手も、足も減りはせぬ、なんぼうでもいゝ仕事が出來る、又悪い事をする段になると、いくらでも悪い事が出來る。

○

人間が不自由なき陽氣暮しを爲す爲には、よいものを視、よ

いことを聽き、よいことを語り、よい仕事さへしてをれば、いつまでも喜んで使へるのに、悪いものを視、悪いことを聽き、悪いことを語り、悪い仕事をするのに慣らされてしまふと、人間の一生はそんな不幸なものと決めてしまふやうになる。それを天が見るにみかねて使用禁止を命ぜられることがある。

それが身上（病氣）といふものである。

○

然し、よいものを視、よいことを聽き、よいことを語り、よい仕事をするやうな使ひ方は、自然にかなふた使ひ方である故に、いつまでも永く使ふことが出來る。天から差止めを喰ふやうな事はない。これが健康の喜びである。

よいものを視るのも、悪いものを視るのも、よいことを聞く

のも、悪いことを聽くのも、よいことを語るのも、悪いこと
を語るのも、よい仕事をするのも、悪い仕事をするのも、
めい〳〵の心一つである。
めい〳〵の心さへ、眞實になつてくれば、すべてがよくなつ
てくる。一切が明るく生き〳〵としてくる。
然し心が不純になつて來ると、眞實より遠ざかつて來ると、
すべてが悪くなつて來て、一切が暗く生氣を失ふに至る。

○

お道の生活態度は、使ふて生氣を失ふ樣な、行き方ではなく
て、使へば使ふほど、生々と延びてゆく使ひ方でなくてはなら
ぬ。

つかへば減るもの千兩小判

減らぬは互ひの實と實

割箸の中から出たこの一首の歌は、い〻歌だと思ふ。

○

信仰は生活である。神がどうの、宗教がどうのと、理窟を云
ひ合ふことを信仰の生活だと考へてゐる人もあるやうだが、よ
くそんな暇があるものだと感心させられる事がある。
何が尊いと云ふても、自分の生活を、日々に新たにすが〳〵
しく充實せしめて行く人の姿ほど尊いものはあるまい。

○

何がみぐるしいといふても、自分の生活を隙だらけにしてお
いて、不足や、ぐちばかりこぼしてゐる人の姿ほど、哀れにも
みぐるしいものも亦あまり數あるまい。

○

私達の生活、小は自分自身の生活から、大は國家社會の生活に到るまで、殆ど問題の絶えることはない。

生活するといふことは問題と闘ふと云ふことだとも云へる。

問題のない生活、そんなものは恐らくあり得ないであらう。

嚴密に考へて、身上事情のない世界、そんな世界は地上の何處を探し求めても、見付け出す事は出來ないであらう。

○

この身上や事情に出會ふと、不平を述べ、ぐちを云ひ、悲觀絶望と云つた暗い心持を抱きながら歩む人々が多い。

○

又或る人々はまゝならぬのが浮世だ、これが人生といふもの

だと、淋しくあきらめをつけて仕舞ふ宿命論者もある。

○

人生は果してこんな暗いものだらうか。

事情身上、その他百般の問題は、私達の生活を一層充實せしめ、一段と向上せしめる尊い糧であると見ることが出來ないであらうか。

○

私たちの教祖様は、生活をもつてこれを教へ給ふのである。

だから天理教の教へには、

歡喜はあつても不滿はない。

光明はあつても暗黑はない。

向上はあつても退嬰はない。

陽氣はあつても悲觀はない。のである。

○

一雨毎に草木は成長する。春が訪れる毎に花が咲く、而しその間炎熱の夏、嚴寒の冬がそれを助けてゐることを悟らねばならぬ。

○

極樂の世界とは、身上事情の無い靜止の世界を云ふのではない。陽氣暮しとは問題の無い安逸の生活を云ふのではない。

○

身上事情を成人の糧とし、進歩の節として攝取し得る生ける魂の世界が極樂の世界である。

問題に遭遇して、自棄せず、悲觀せず、むしろそれを契機として、將來の生活に一段の向上と光明とを發見する生活が、陽氣ぐらしである。信心の生活である。

○

お道の信心は身邊におそひくる苦惱を逃避しようとする消極的な態度ではなくて、むしろその苦惱を通じて、更に大きく、更に深く人生の意義と悟得し、將來ます〳〵力强い生活にまで進めるものでなくてはならない。

○

私の母は、一昨年七十七歳で逝かれた。漢字一つ讀むことの出來ぬ、わずかに寺小屋で一、二年の教育を受けたにすぎない婦人であつた。然し本教に入信以來、四十三年の間、經濟的壓

迫、家庭的不遇、人々の冷笑、加ふるに幾多の身上事情に遭遇せられたけれども、不平、不満、悲觀、失望の聲を唯の一言も私は母より聞いた事がなかつた。永い人生の苦闘の旅に、捧げ續けられた心持は、唯さんげと感謝の喜びより外に何ものもなかつたやうに思ふ。

○

この母の心境を思ふとき、恐らく世界に雄飛せし、大英雄の心境にも劣らぬものである事を私は信じてゐる。母は私の信心の恩師である。私は母なるが故に云ふのではない。一個の婦人としても尊敬せずには居れぬ一人であつた。

○

〃汝の敵を愛せよ〃といふ言葉がある。闘ひの最上なるものは、敵を克服せしむることではなくて、愛の力をもつて、敵を味方にすることである。

○

教祖様は泥棒を、道理と愛とで己れの味方になし給ふた。教祖様は己れを殺害せんとした女中をも、愛の心で味方になし給ふた。教祖様の向ふ處に敵はなかつた。

○

事情も身上も天地のあらゆる問題も、私達の生活をおびやかす、生活の敵である。然も今これを克服し得たりと云へども、又次から次へと新しくおそひくる敵である。永久に根絶し得ざる生活の敵である。

この生活の敵を、味方と爲し、己れの生活をより意義深く、

より輝かしく、導き育てることが出來るならば、私達の生涯は如何に樂しくも亦愉快な事であらう。

○

教祖樣はこの世の中の生活を、神のふところ住ひをさせて頂いてゐるのであると申された。神のふところ住ひに何の不安があらう、何の心配があらう。

○

生活の敵とのみ思ふてゐた身上事情、その他百般の問題も、それはことゞくこの世が神のふところ住ひである事を悟る尊い手引きである。

○

神のふところ住ひをしてゐるものには、さんげと感謝より外

にあらう筈がない。さんげと感謝の連續こそ、信心に精進するものゝ生涯であらねばならぬ。

○

人に親切を盡せば、親切を受けた人は、その親切の有難さを知る。

人を尊敬すれば、尊敬された人は尊敬のよさを知る。

人を愛すれば愛された人は、愛の尊さを知る。

教へるといふことは、その味ひを知らせる事であつて、概念的な理論や理窟を覺えさせることだけが教へることではない。

さう考へると、説明が出來なくても、理窟が判らなくとも、このことを教へたいと思ふことを先づ自ら相手に捧ぐべきである。

心から盡したものは相手に判る。それが本當に教へるといふことになるのではないだらうか。

宗教を弘めるといふやうな事でも、説教や講演で弘まるものではなくて、その人の教へに沿ふた生活だけが、弘まつて行くのではないか。

教へるといふことは、眞實を捧げることである。身をもつて盡すことである。自から行ふことである。

このことは教へにたづさはるわれ〳〵の、忘れてはならぬ一番大切なことである。

○

人から非難をされると、すぐ云ひ分けをしたい心持が起る。これは、實にはづかしいことである。

非難に對して云ひわけをしようとする心持の中には、自分を飾らうとする。まことに不純なものがある。

非難せられる事を恐れるよりは、非難を辯解しようとする自らの狹さと、不純さを非難してゆけるやうになりたいものである。

有難い説教を聞かせてもらうよりも、非難を有難く受けて、己れの魂の糧にしてゆくはうが、どれだけ大きく延びるか知れないと思ふ事さへある。

非難は何よりも有難い心の糧でなければならぬ。

○

私が一人で靜かに己れを見つめてゐる時、お前は嘘つきぢやお前は恥知らずや、お前はなまけものぢや、お前は信心の足り

ぬ奴ぢや、そんな事でどうするか、四方八方からせめられる聲が聞えて來る。この聲の聞えてゐる時が、私の一番深い時であり、本當の姿の時である。

少くとも私の頭の一番ハツキリした時である。頭の惡い時や、表面的に立ち働いてゐる時には、そんな聲は一つも聞えて來ない。むしろその反對の聲が聞えてくる。この時が私の一番危險な時である。

○

毎日自分の生活を反省してみると、殆んどその大部分が無意識的に行動してゐる。その無意識の行動をつぶさに點檢して見ると、ずゐ分穴だらけである。如何に修養が足りないかといふことを、沁々さんげせずには居れない。

無意識のうちに營まれてゐる行動の一つ〳〵が、己れを生かし、他を生かすものになつてゐなければ、まだ〳〵本物とは云へないであらう。

己れの欲するまゝに從ひて法を越えずと云ふのは、無意識に行はれてゐる行動の一つ〳〵が、チヤンと線にのつてゐるといふことではないかと思ふ。そこまでゆくのには容易な努力ではない。本氣で精進せねばならぬ。

○

せめて一日三度の食事をいたゞく時だけなりとも、敬虔な心持で反省したいものだ。

○

一椀の飯にも、天の惠み、地の霑ひで、數知れぬ人々の尊い

勤勞が、一杯に盛られてゐるのだ。凡常な日々の生活の中にも、盡きせぬ惠みを限り無く頂いてゐるのだ。それだのに無意識に過ごす私の生活は、殆んどこの無限の惠みも、有難さも見失ふて仕舞ふて、時には不足の心持さへ頭を上げる事の多いのは、何と云ふ恐ろしい事であらう。

教祖樣は一枚の菜の葉も粗末には扱はれなかつた。

本席は一枚のチリ紙も無駄には使はれなかつた。

教祖樣や先輩の道を思ふと、勿體なうて涙がこぼれるやうに思ふ。

○

物を粗末にしないと云ふことは、物の有難さを知ることによつて初めて行はれるのではないか。

一枚の菜の葉
一粒の米
一杯の水
の中にも天地の惠みが溢れてゐる。これを思ふとき勿體なうて粗末には出來ぬ。

○

一錢の金を粗末にするものは、一錢の金に不自由をするといふ諺がある。一枚の菜の葉を粗末にするものは、一枚の菜の葉にも不自由をする日が來るとも云へる。一粒の米を粗末にするものは、一粒の米にも不自由をする日の來るのは當然ではないかと思ふ。一杯の水を粗末にするものは、一杯の水にも不自由をせねばならぬのも亦道理であらう。

子供の頃、よく老母が御飯粒をこぼしたら目がつぶれる、と私に教へてくれたが、その頃は本當に何とも思はずに聞いてゐたが、今になつて思ふと、目がつぶれるどころか身體がつぶれて仕舞ふかも知れぬとさへ思ふ。

○

この頃經濟の問題を、なか〳〵やかましく論議されるやうになつたのに、勿體ないと云ふ事はあまり云はないやうであるが、これはまことに片手落ちな事ではないかと思ふ。本當にみんなが勿體ないといふ事を知つた時に、經濟の問題は自から解決されるのではないかと思ふ。これを抜きにしてはどんなに經濟問題が論議されても、事實に解決はつかないものではないかと思ふ。本當に勿體ないといふ事を知る生活には、行詰りはな

い筈である。

勿體ないと云ふことを知らずに、一體何が解決出來よう。一切の問題の解決もこゝから出發せなければ、決して根本的の解決ではない。

○

信心といふことは、又恩を知る生活であるとも云ふことも出來る。

○

吾々がこの世に、生れて來ることも、育てられてゆくことも又あの世に出直してゆく事も、ことゞく〳〵く恩につゝまれつゝ營まれてゐるといふことを沁々思ふ。私達が宇宙の外に一歩も出ることが出來ないやうに、恩の外に一歩も出る事が出來ない。

○

東を見ても、西を見ても、南を見ても、北を見ても、又上を見ても、下を見ても、内を見ても、外を見ても、御恩が遍満してゐる。私達の受けてゐる恩は實に無限である。私達の日毎日毎の生活は御恩のうちに呼吸してゐるのである。

○

御皇室の恩、神様の恩、師の恩、祖先の恩、兩親の恩、朋友の恩、人々の恩、妻、兄弟、子供などの恩、食べるものゝ恩、着るものゝ恩、住む家の恩、草木、鳥魚その他一切の眼に觸れるもの、耳に聽ゆるもの、ことゴくの上に、深いゴ恩を思はずには居れぬ。

○

親鸞上人の和讃の一節に、

如來大悲の恩德は、身を粉にしても、報ずべし、師主知識の恩德は、骨をくだきても謝すべし、とあるが、まことに報恩といふことほど大切な心掛けはあるまい。

○

たゞ如來大悲や師主知識の恩德だけが、身を粉にし、骨をくだきても報じ得ざるのではなくて、すべての恩德に對して、私達は身を粉にし、骨をくだいても、報謝しつくす事は出來まい。

○

靜かに思案すると、私達の受けてゐるどんなさゝやかな……と思はるゝ恩に對してゞも、その恩をもうこれでよいといふまでに返し切ることは、絶對に出來るものではない、

○

世の中の事を、物と物との關係と思ふて仕舞ふ人には、恩は極めて簡單であるかも知れぬ。拾圓借りたら拾圓返せばそれで濟むのである。菓子折を頂けば菓子折を返せばそれで濟むかも知れん。

○

信心の世界は、有限の物と物との關係だけではなくて、限り無き心と心のつながりの世界である。

○

物を買うても、人に事を賴んでも、代金さへ支拂へば、賃金さへ渡せば、それで萬事が濟んだやうに考へる人があるならばそれは餘りにも、心の無いことではなからうか。

○

私はよく肩をこらします。從つて時にあんまを賴むことがある、一生懸命にもんでくれる。濟んだ後で賃銀を支拂ふ時に、いつも先方から要求せられたゞけのお金を支拂ふて、それでよいのだらうかと、何となくそれだけでは濟まないやうな心になることがある。先方は商賣、こちらはお客樣だから要求されたお金さへ渡せばそれでいゝ筈である。先方にも不足は無い筈と云へる。然し、それだけではどうも濟んだ心持のせぬことが多い。私の苦しみを解くために捧げてくれた心盡しと、努力、又それに要した時間など思ふた時、只賃銀だけで、それで濟んだとは思へないのである。心から有難う、どうも濟みません……と云はずには居れないのである。

○

自動車や人力車に乘つても、同じやうな氣持がするのである。勿論その時と場合にもよるであらうが、どうも賃銀だけでは濟まぬ心持がする。濟みませんでした。有難う御座いましたと、心のうちで御禮を申さずには居られないのである。

○

買物に行つても同じ思ひがするのである。自分のほしいものを買つて、代金だけ支拂つてそれで濟まされた心にはなれないのである。

思はず有難うといふ言葉が出て來る。

賣つた方も有難いのでせうが、買つた方は一層有難いのではないか。

○

知らない處へ旅をして、親切に教へられた道筋、それは知れるものには何んでもない事であるかも知れませんが、判らぬ道を教へられた旅人にとつては、いつまでも忘れ得ぬ喜びである。

○

汽車の旅をしても、赤帽やボーイからわづかな賃銀や謝禮の金で、丁寧に頭を下げられると、どうしていゝか判らぬ事さへある。本當に濟まぬ事だと思ふ事が多い。

○

近頃、電車やバスに乘ると、車掌が、まことに相濟みませぬが……と何事か乘客にものを云ふ時に、よく附けるのを耳にす

るが、これはまことによい言葉であると思ふ。

私達の生活を、何等かの意味に於て、救けてくれる一切のものに、よしそれがいかにさゝやかなものであらうとも、その恩徳に對しては、決して報謝を果し得るものではないのだから、相濟まぬ事ばかりである。

○

私達の心のうちに、充たされない心持の起る時は、それは限り無き恩徳を忘れてゐる時であつて、私達がこの限り無き恩徳を沁々感じた時、只、感謝の念が起り、歡喜の心が湧くばかりである。

○

限りなき恩徳を知ることによつて、自から報謝の念が生れて

くる。報謝の心は、報いても〳〵報い得ない、更に廣大無邊の御恩得を感ぜしめる。

私達がこの報い得ない、廣大無邊な大恩のうちに生を享けてゐるのだといふ事を思ふ時、一切のものが、たゞ尊く、有難く感ぜずにはをれないのである。

○

信心の歡びはこれである。

○

信心は物の世界のみではなくて、心の世界である。

○

私達は御恩のうちに生れ、御恩のうちに育てられ、御恩のうちに死すのであつて、御恩に報ゆるなどゝ思ふことすら、出過

ぎた思ひではないかと思はれる。實に御恩を受けづめに受けてゐるのであります。御恩に明け、御恩に暮れてゐるのが私達の一日であります。

勿體ない事である。有難い極みである。

○

ポツン〳〵と落ちる雨だれの水に、どれだけの力があらう。けれども五年、十年、二十年、三十年、五十年と、同じところをたゝくうちには、つひに石に穴をあける。

柔らかいものが硬いものに打勝つといふことが考へ得られるだらうか。けれども一滴々々の雨の雫が、つひに石に穴を明けるといふ事實はどうしようもない。

年限の力、不斷の力といふものが、如何に大きいものである

かを悟らせる。

世の中には強さうに見えて弱いものがある。反對に弱さうに見えて強いものがある。

○

水は方圓の器に從ふといふ。

コツプに容れると水は圓くなる。桝に入れると四角になる。

而しこれがために、水は無節操だといつて笑ふ人があつたら

それは大きな誤りである。水ほど素直なものもないが、水ほど節操の高いものもない。

如何なる力をもつてしても『低きにつく』といふ水本來の節操をまげることだけは斷じてない。時に文化は水を支配下に扱ふた如く見える事があつても、所詮水は本來の節操を忘れるこ

となく、つひに、こん〳〵として低きに歸りゆく。水の節操を破り得るほどの何物もない。何の力さへも持たぬが如く思はれる。素直な水の節操こそ天下無敵である。

この間の阪神間の水禍は、無言のうちに水の力の偉大さを知らしめた。千萬斤もあらうといふ大きな岩石を木の葉よりも輕くもてあそんだ。

何の力もあらうと思へぬポツリ〳〵とおちる雨の雫が、そして如何なる器にも從ふ素直な水が……。

この恐ろしい力は、一つ〳〵の雨の雫が一つに集つて、低きにつかうとする水本來の歩みを營んだまでの事である。千萬斤の岩石を輕々ともてあそぶ恐ろしい力の水も、コツプに汲めば圓く、桝に容るれば矢張り四角に、方圓そのまゝに從ふ素直な

水である。

擧國一致といふ意味も、今はもつと〳〵本氣で考へて見る必要がある。

一つ〳〵には何の力もなささうに思へても、一億の臣民が一つに解け合ふところに無限の新たなる力が生れる。

○

己れの型をつくり、己れの型にはめ込まねば承知の出來ぬ利己主義的な生き方には、何の力もあらう筈がない。小さい我を守るのではなく、全體のうちに解け込むでゆく無我の態度こそ、天下無敵の力といふべきである。

水は己れの我をもたぬから會へば其儘一つに流れる。何千、何萬の水の雫も會へば一つの水になる。そして共に低きへ〳〵

と歩みつゞける。低きにつく水の態度には少しの力みもない。こんな素直な水に、どうしてこんな恐ろしい力が生れるのであらう。妙味はこゝにある。

○

心にしまりの無いのはいけない。しまるところはやはり、きちつとしまりがなければいけないと思ふ。けれども心にしまりのあると云ふのと、力むのとはよほどちがふ。どうかすると私達はこれを混同してしまふことが多い。

力むでゐる姿は、一寸外からみるといかにも緊張してゐるやうに見えるが、内側は空つぽで、風船玉の張り切つたやうなもので一つ穴があくと、へな〳〵になつてしもうて、もちもさげもならなくなつてしまふ。

しまりのある心といふのは、そんなものではない。外に心を使ふのではなくて、内にしつかりしたものをつかむのである。

力む生活は私を立派に見せやうとする虚勢の生活であるが、しまりのある生活といふのは、外にどう見へやうと、それは問題ではなくて、内を満たさうとするのだから眞實である。

○

眞實の生活といふものは、自然のうちにとけた生活だから一見弱さうに見えるかも知れぬ。けれどもすきがないのだから、結局は一番強い生き方である。

いまどきの社會生活には、力むといふことも時には必要な場合もあるかも知れぬが、それよりももつと〳〵大切なことは、すきのない營みである。外を見る以上に内をみつめる事が大切

である。

○

私の友人に喫茶店の通人が居た。どこそこのコーヒーがうまいとか、かしこのコーヒーは不味いとか、などよく聞かされたものである。ものずきな私は、きかされると暇を見て歩き廻つたことがある。酒の味を知らぬ私は、コーヒーや、紅茶や、ソーダ水などをよく口にしたものである。

しかし、いつの間にか、かうしたものにもあきたやうな氣がする。

なんにも味のついてゐない冷たい水が、一番おいしいのではないかといふ氣さへする。

水の味といふものがわかりかけて來たのであらう。水道の水より地の底からわき出る井戸の水の方がうまい。井戸の水よりも、深い山の水の方が更にうまい。

何人も味をつけたことのない水に、なか〳〵捨て難い味のある事を知るやうになつた。

いろ〳〵と技巧や味付けを施した高價な飲み物より、只の眞水の方が、はるかにすてがたいうまさがある。

○

知識や、辯舌や、學問などでいろどられた、所謂近代人型の人間には、喫茶店通の喜ばれるコーヒーや、紅茶や、ソーダ水の味はあらう。けれども眞水の味は、矢張り平凡に見える自然人のうちに味ひ得るのではなからうか。

○

阿呆は神の望み……と申された教祖の言葉を悟るまでには、私はずいぶんまはり道をして來たやうに思ふ。

近ごろの教育といふものはみんな『かしこい人間』といふものに、めやすをおいてゐるのだから『かしこさ』といふ箔をつけることに汲々としてゐる。

一人前にかしこぶれたら教育の能事終れりといふ事になる。

○

賢こ振つて、時めいてゐる人もあるにはあるが、あぶなつかしい氣がする。むしろ平凡に、その日〳〵を歩むでゐる人の方に、どれほど確かさを感じさせられるか知れぬ。

○

かしこぶるといふ事は人間心である。自分を示さうとする心

である。教祖の申さるゝ阿呆といふのは自然の心である。己れを忘れた姿である。

○

眞の教育といふものは、賢こさの箔をつけることではなくて、人間本來の生地を磨くのでなくてはならない。手數のかゝることだが、私達はつけた『賢こげな箔』をまづすりおとさねばならぬ。それから生地のみがきにかゝらねばならぬ。インテリゲンチヤなどゝいふやからはこの二重の手數がかゝる。

○

なつて來る理をたのしむといふ生き方を私は望む。

私達は餘り將來を豫定しすぎる。豫定通りにゆけば思ひ上るし、豫定通りゆかねば失望する。どちらにしても將來を豫定す

る心のうちには『神』はない。豫定はどこまでも豫定であつて、確定ではないから常に不安が去らぬ。

そんな心もとない不安な生き方をするより、與へられたその日その日に全力を捧げて凡てを感謝し、それを生かしてゆく心持ほど、確かな生き方はないのではあるまいか。己れを捨てたものには豫定はない。

なつて來る理を樂しむ心は『神』を知るものゝみにゆるされた境地であらう。

○

夫に先き立たれて、後に殘つた妻の事を未亡人と呼んでゐる妻として夫に先き立たれたら、もう身も世もあらぬ淋しい思ひがするので、早く自分も死んだ方がいゝ、さりとてさう易々死

ぬ事も出來ない。そんなところから未だ亡びざる人といふ觀念が生じて、未亡人といふ言葉が出來たのかどうか知らぬが、もう少し他にいゝ言葉がないものか知ら、生きてゐる人間に、未亡人などゝいふ呼び方をするのは、あんまり女性を馬鹿にした言葉ぢやあるまいか。

どんなに仲のいゝ夫婦だつて、心中をする以外に、一時に死ぬといふ事はまづあり得ない。どちらかゞ先に死ぬのである。夫婦は一身同體といふ意味から、一方が死ねば殘された一方を未亡人といふのなら、妻に先き立たれた夫も未亡人といふたがよい。

然しまだ男の未亡人といふものを聞いた事がない。女だけに未だ亡びない人などいふのは、どう考へても女性を馬鹿にした

云ひ分だと思ふ。

敢て女の肩をもつといふ所以ではない。けれども女性自身ももう少し省みる必要があると思ふ。男性のみが、夫を失つた女性に未亡人といふ言葉を捧げてゐるのではなくて、女自身が未亡人といふ言葉を平氣で用ひてゐるから、女自身もどうかしてゐると思ふ。

夫に先き立たれて殘された妻が、もう自分はこの世に何の望みもない、夫の後を慕ふて死をまつより外にないと云ふやうな、夫への思慕の情から未亡人と自ら稱するのであれば、もつともつと愼んでいゝ未亡人、もつと〳〵謙虛であつていゝ未亡人も相當にあると思ふ。

むしろ所謂未亡人になると、一家の暴君にさへなる傾きがな

からうか。未亡人といふ言葉は一體何時頃から、誰が云ひ出したのか知らぬが、それとも何處の言葉の飜譯か、それも知らぬが、少くとも現代では變な言葉である。

もう少しいゝ言葉があつてもいゝと思ふ。

けれども未亡人といふ言葉は、裏長屋に住むおかみさんには餘り用ひない樣である。多くは某々家といはるゝやうな連中に用ひられるやうであるが、裏長屋では、多くは後家といふ言葉が用ひられてゐる。この言葉の方がはるかに意味がある。確かに殘されたものは、後の家を護つて行く責任がある。未だ亡びないなどゝいふセンチな考へ方より、後を引き受けて護るといふ積極的な考へ方の方がはるかに進んでゐると思ふ。

○

目の中に入れても痛くないほど可愛がつて育てゝ來た自分の娘を、お嫁入りさせるのに親は娘を片附けるといふ。一體片附けるといふ言葉は、そこらあたりに散らばつてゐる邪魔物、やつかいなものを始末するのに、用ひる言葉であつて、大切なものを扱ふのに片附けるなどゝは申さぬ。

女性を無視した言葉といふ點から云ふと、片附けるなどゝいふ言葉も、未亡人以上のものぢやないかと思ふ。娘はそれほどやつかいなものだらうか。

この言葉も、その始めは、婚儀といふものは人間一生の大儀であつて、なか〳〵容易なものぢやない。その大儀が恙なく片が附いたと云ふ喜びから出たものだと想像はするが、少くとも現代ではそんな意味には用ひられてゐないやうに思ふ。

女を輕く見た言葉だと思ふ。息子を他家にやつても、養子にやつたとか、婿にやつたとか云ふが、片附けたとは餘り云はぬやうに思ふ。男自身にしても私はこの家に片附いて來ましたとは云はぬ。けれども娘の子は平氣で、私は片附いて來ましたと云ふ。

親は片附けたといひ、娘は片附いて來ましたといふのだから問題はないやうなものだが、問題のない言葉を取り上げて問題にするのは、平地に浪を立てるような事になつて感心した話でもないが、何と云つても、男尊女卑の舊風が、未だ日常の言葉の上にも遺つてゐるやうに思へてならぬ。

佛者や儒者が日本の文化の上に貢献してくれたことは決して少くはないと思ふが、女を馬鹿にする事を教へてくれた事は、

餘り有難い事ではない。

女は男よりもすべての點に劣つてゐるといふ見方は、決して正しいものではないと思ふ。事實劣つてゐるとするならば、それは女は低いもの、卑しいものと教へて來た誤れる考へ方が、自然に女を無力なものにして來たのであつて、これは非常に誤つた教育の結果であると云はねばならぬ。最初から女が男よりも劣つてゐたかどうかについては、疑ふ餘地は充分にある。

こんな非常時になると、女性自身も一層自覺をして、男子に劣らぬ、銃後の護りをしてもらはねばならぬ。總動員といふことは階級の如何、職業の如何を問ふのではない。勿論男女の如何をも問ふものでもない。等しく日本臣民たるの自覺をもつ以上、各自が誰にも劣らぬ務めをせねばならぬ。

直接たづさはる仕事には相違があつても、敢て男松女松のへだてのあるべきではない。

○

まねかれて新築地劇團の芝居を見る。山本有三氏の『女人哀詞』をやつてゐた。『お吉』に扮した山本安英の藝には感心してしまつた。彼女の生活態度を聞かされて、更に敬意を拂はざるを得なかつた。苦しい中からもグン〳〵進んで行く新築地劇團の『力』といふものが判らせられたやうな氣がする。

いつか吉右衛門の芝居を見たことがある。

嚴寒の時分だつたのに、清正に扮してゐる吉右衛門の顏を花道の下からのぞいてゐると、彼のひたいからはあぶら汗が流れてゐた。私は思はず眼頭があつくなつた。『吉』の藝道に對す

る眞劍さに打たれたのである。

寒中あぶら汗の流れるほど『自分の道』に精進する彼の態度を讃へずにはをれぬではないか。

口先や手先で、物眞似するだけでは名優にはなれぬ。

彼等は役者である、吾等は教家である、もつて他山の石とするに充分なるものがある。

○

夏が來ると必ず野も、山も、庭も、青葉に包まれる。そして秋風が吹き初める頃になると、この鬱蒼とした青葉が一枚二枚と散り初めて、やがてどの木も、この木も、大方の雜木は枯木のやうに骨ばかりになつてしまふ。

これがもし逆に、夏が來ると枯木になり、秋から冬に青葉が

茂つたらどうだらう。

夏に青いものが見えなかつたら、想像したゞけでも苦しいことである。北風寒い冬に青葉で包まれたら、どんなにつめたからう。

自然は實にうまく出來てゐる。いや神樣の御攝理は思へば思ふほど勿體ないことである。

夏は暑いと不足をいひ、冬は寒いと不足をいふ。そして梅雨時はうつとうしいとかこつ。だが、若し夏が涼しかつたり、冬が暖かゝつたら、そして梅雨期に雨がなかつたら、どうして萬物が育ち得るであらう。暑いのも、寒いのも、うつとうしいのも、一切が神樣の深い御攝理であることを悟ると、有難さにこそ感謝せねばならぬが、不足などどうしていへやう。

自然の前には頭が下がる。

神様の御攝理には感謝の外はない。

神様を信ずるものには、有難さに泣けても不足の云へやう理由がない。

○

商賣をするのに、新しい得意をつくることに骨を折るといふことも大切ではあらうが、更に大切なことは、今日までの古い得意を大切にするといふことではないかと思ふ。現に自分の店へ買ひに來てくれた人を大切にし、滿足を與へて歸したら、その人はまた買ひに來てくれる、そして他人にも傳へてくれる。得意は自然に殖えてゆく。

○

教會でも同じことがいへると思ふ。

新しい信徒を作るために傳道することも大切であるが、今日までの古い信徒を本當に育てるといふことは、更に大切なことではないか。

眞に道の有難さが判り、救はれた喜びを感じた人は又それを他人に傳へ、他人を導くに相違ない。

新しい得意を作ることにのみ汲々として、古い得意を粗末にする店は、夜店の露天商人みたいなもので、本當にいゝ大商店にはなれぬ。

○

新しい信徒を作ることにのみ努力して、今日までの古い信徒を本當に育てることを忘れてゐる布教師がありとすれば、これ

ほど愚かな布教法はない。底の破れた器に水を入れてゐるのと少しも異ることはない。入れても〳〵水のたまる日は來ない。底さへもらぬやうにしておけば、たとへ一滴々々の水でも、たまつてゆく。いつかは器に一杯になる日が來る。商賣の道も布教をするものもこの道理には變りはない。新しい得意を追ふだけではいかん、古い得意を失はぬやうに心掛けることが肝要である。

○

幾百尺もあらうといふ大木、幾抱へもあらうといふ巨木は、誰が手入れをしたといふこともない。大自然のうちにのみ育つて來たのである。幾十年、幾百年と、太陽に照らされ、雨にたたかれ、雪にうもれつゝ遂に伸びて來たのである。

寒さを厭ふて溫室に、暑さをさけて陽陰にと、行き屆いた手入れを怠らぬ盆栽には、斷じてかうした大ものは出來さうにもない。

今の教育にはどうも盆栽式が多いやうに思へる。細かいことにのみ立入り過ぎて、大ものを育てることを忘れてゐるかのやうに思へる。

どちらを見ても小利口な人間ばかり多くて、大ものゝ少いのをかこちながら、矢つ張り人を教育するとなると盆栽式になり易い。

人がないのではなくて、人を育てないのだとも云へる。

このことは勿論學校の先生だけの問題ではない。總てのものが本氣で考へて見る必要があると思ふ。これは何でもないこと

の様に思へて、その實こんなにむづかしい、そして重大な問題はない。

だが又これ程尊い、愉快な問題もない。

○

人は必ず一度は出直す日が來る。

明日の日を知る人は何人もないけれども、將來出直すといふ事だけは、何人が誰の前で斷言しても間違はぬであらう。たゞ何日、何處で、どんな風に出直すかといふことだけは知る由もない。

しかも百年、二百年の後までも生きる人は殆んどないと云つても過言ではない。

人の努力によつてある程度いろ〳〵な不幸から逃れ得る事が

あるとしても、出直し(死)から逃れる事だけは絶對に出來るものではない。生きとし生けるもの、必ず一度は死に直面する日はある。

○

どうしても逃れ得る事の出來ぬ出直し(死)ではあるが、人は一番これを恐れてゐる。いくら恐れても、きらつてもこれだけは貴賤貧富の別なくやつてくる。

この(死)出直しの問題を解決しない限り、人生には本當に安心立命はない筈である。

果して出直しの解決する方法がありや。

只一途あるのみ。

生命を賭しても惜しくはないといふ立派な道を發見する事で

ある。

この事のためなら、この理想の實現のためなら、この生命をいくら捧げても、惜しくないといふものを摑むことである。

そんな大きな大事業があるだらうか。

ある、確かにある。

それは何んであるか。

我が神國日本の爲めに生命を捧ぐる事である。日本の礎を固める爲めに捧ぐる生命は、やがて東洋の安定と、世界人類の爲めに捧ぐることになる。

こんな大事業は恐らくこの地上に二つとはない。こんな大事業のために役立つならば、五十年、百年のいのちが何んで惜しからう。

これこそ生命を賭して悔ひなき道である。

この眞理の發見こそ、眞の安心立命といふものであらう。

これ以外に眞の安心立命はない筈である。

このことを自覺する以外に、吾々が眞に安心立命の境地に到達する道はない。

日本の國家の爲めに殉ずることは、國家と共に生くることである。皇軍の將士が戰場で倒れる時、萬歳と叫ぶのは、死するのではなくて、國家と共に永久に生くることを壽ぐのである。萬歳は將士だけが獨占すべきものではない。一億の民ことごとく、いつどこで死すとも、萬歳と叫び得るだけの覺悟がなくてはならぬ。

萬歳の境地こそ死を越へた境地である。この境地にのみ永遠

に亡びざる世界がある。永遠に亡びざる世界に住み得て、はじめて眞の安心立命の境地に到達し得たと云ひ得るであらう。

○

いかにいゝ仕事であつても、それが誰にでも出來るといふものではない。

學問がなくては出來ないといふこともあらうし、金がなくては出來ないこともあらう。

又力が無くては出來ない事もあらう。

けれども、本教のひのきしんだけは如何なる人にでも出來る。貴賤貧富、老若男女の別なく、何人にでも出來る。

過般、中外日報社社主眞溪涙骨氏に會ふた時、氏は本教のひのきしんを絶讃せられた。恐らくひのきしんを賞讃するのは啻

に氏だけではない。相當天理教の惡口を云ふ人達でも、ひのきしんだけは讃美する。

まだ曾てひのきしんの惡口だけは聞いた事がない。

これほど何人からも讃へられるひのきしんが、誰にでも出來るのだから愉快だ。

ひのきしんをなすのに、學力も、金力も、資格もいらん。女中樣でも、奥樣でも、下男でも、旦那さまでも同じやうに出來るのが何より嬉しい。

ひのきしんは如何なる人にも賞讃せられることであつて、しかも、何時、いかなる場合でも、誰にでも出來るところにひのきしんの廣さと深さとがある。

○

誰にでも出來るこんな尊い生活が、手近にあることを人々は知つてゐるのかゐないのか。

近頃橿原神宮を中心としての建國奉仕の勤勞が、全國的になつて來た、こんなうれしいことはない。

○

己れを忘れて、人のために、社會のために、國家のために捧ぐる感謝の生活こそ、ひのきしんである。

言葉はどうでもいゝ、この精神こそ、この生活こそ、今日の日本にとつて最も尊いものであらう。

○

こちらの身體が健康で、空腹でさへあれば何を頂いてもうまい。然しどんな御馳走を出してもらつても、胃が惡いとか、お

腹が大きいといふのでは少しもおいしくはない。

○

すべてこちらの態度一つで決するものである。

己れの魂が、己れの精神が明かであれば、何時何處に行つても明かであるべき筈である。

一切の幸、不幸はこちらの腹一つできまるやうに思ふ。

見るもいんねん、聞くもいんねんと教へられた教祖の思ひも悟らせて頂けるやうに思ふ。

月影のいたらぬさとはなけれども
蓋ある水に月は宿らじ

誰の作か知らぬが、こんな歌が短冊に書かれてあつたのを讀んだ事がある。歌としてのよしあしは別として、その通りだと

思ふ。

世の中は變化極まりない。まことに定めなきものゝやうにいふ人もあるが、それよりももつと〳〵定めなきものは己れの心なのである。己れの心さへ、己れの精神さへ、はつきり定まつたなら、何がどう變らうと驚くことはない。

人間は精神を練ることが肝要である。腹を作ることが大切である。

○

隨分馬鹿げた話をしてゐても、何處となくゆかしさを思はせる人がある。どんな苦勞話をしてゐても、少しも暗さを思はせないで明るさを感ぜしむる人がある。眞面目に一生懸命に話をしてゐても、どうも下品な感じをいだかしめる人もある。

默つてゐても何かしら犯し難いものを訴へる人。どんなに顏に青筋を立てゝ怒つてゐても滑稽を思はしむる人。實に筋の通つた話をするのに何の魅力も持たぬ人。ひつかゝり、ひつかゝりして、話としては決して上手ではないのに、何ともいへぬ魅力を持つ人がある。

これは話だけではない。

服裝一つにしても同じことで、粗末なものを身につけてゐても、決して賤しく見えない人もあるし、相當高級なものを身につけながら、少しも引き立たぬのみか、却つてそれがために下品に見える人さへある。

それはその人の品格といふものが然らしむるのではないかと思ふ。品格を作り上ぐるに最も重要なものは、矢張りその人の

精神であらう。

人間は生活全體の上に、あらゆる方面から進歩改善に留意することは結構なことではあるが、その根本的なものはどうしても外の生活ではなくて、肉眼で見えぬ精神生活に磨きをかけるといふことである。

どうも話がどうの、文章がどうの、服裝がどうのと外側のことには氣がつき易いが、肝腎要の內側の精神を磨くことがお留守になり易い、これではなんにもならぬ。

○

彼はちよつとした傷だからといつてそのまゝに打ち捨てゝ置いた。そこから化膿して、それが段々大きくなつて、つひには片足を切斷してしまはねば一命にもかゝはるといふやうな結果

になつてしまつた。

到頭彼は片足を切斷してしまつた。そして辛うじて一命だけは取止めたのである。

○

千軒をやき盡すやうな大火も、その元は一本のマッチか煙草のすひがら位のものである。

千里の道も一歩なりと云ふ。

○

一寸した機會が人間の一生を左右することがある。機會なんていふことは何んでもないやうに思ふ人もあるが、これほど不思議なものはない。又これほど恐ろしいものもない。

人間は大きな事には驚きあわてふためくが、とかく小事はな

ほざりにし勝ちである。

○

その日〳〵の心掛け、その日〳〵の勤め方が一番大切である。われ〳〵はともすると大事と小事と見違へたり思ひ違つたりすることがある。日々常々の凡庸の生活が、大切であるといふことは、教祖樣がいつも考へられたことである。

○

昔の人は自然に對しても非常に謙虛な心持をもつてゐたやうである。一例を云へば山に登るのにお山へ參ると云ふてゐた。近代人は山を征服すると云ふ。

參るといふ言葉のもつ心持と、征服するといふ言葉のもつ心持との間には、相當なひらきがある樣に思ふ。自然科學といふ

ものが發達した近代的教育に培はれた人々だから、征服などゝいふ言葉が平氣で用ひられるのだらうが、もう少し人間は自然に對して謙虛な心持ちがあつて然るべきだと思ふ。

○

今日の若い人々は新聞紙などでも平氣で粗末に使ふ。甚だしいのになると、便所にまで用ひる。活字の發達した今日の人々には、さしてそれが惡いことでもないやうに思はれるのであらうが、昔の人は文字といふものに對しては實に謙虛な心持をもつてゐた。文字の書かれてある紙片を鼻紙代用にしたり、便所へ持ち込んだりするやうなことは絶對になかつた。氣持の上にさうした事が到底許されなかつたのであらう。

私は敢て新聞紙や其他の印刷物の利用を兎や角いふのではな

い。もう少し何事に對してゞも謙虛な心持があつてもいゝので
はないかと思ふ。

○

ものに對する謙虛な心持が、それが生活刷新に如何に大きな
影響を及ぼすものかを沁々思ふ。

生活を改善するといふことはたゞ功利的な、表面的な經濟上
のことだけではない。もつと根本的な物を見る心持にまで及ん
で、初めて徹底を期することが出來るのであらう。

あんまり總てが上すべりし過ぎてゐることが淋しい。

○

若木のあひだならば曲げることも、延ばすことも意のまゝで
ある。老木になつてはもうどうにもならぬ。

人間を教育するのもこれと同じ道理である。一番大切なのは
赤ん坊の時であらう、少くとも少年の頃に爲さねば思ふやうに
はならぬ。

この時代に爲された教育といふものは、その人の生涯を支配
するものである。

大學や中學校で受けた教育よりも、小學校で受けた教育の方
が、はるかに魂の底にこびりついてゐるやうに思はれる。

老人や壯年は、昨日の國家を脊負ひ、今日の社會を脊負つて
ゐるとはいへ、明日の國家社會を脊負ひ立つものは、誰が何と
いつても青少年である。今日の青少年の教育一つによつて、明
日の國家社會が決定せられるといふても過言ではあるまい。

百年の計を立てるものは、明日を眞劍に思ふ。何と云つても

このことを眞劍に考へねばならぬ。

道は末代の道である。如何に今日が忙しくても明日の事を忘れてはならぬ。百年の計を怠つてはならぬ。この意味においていちれつ會の仕事は、今日如何に苦しくとも、將來を思ふときどうしても爲し遂げねばならぬ大事業である。この自覺は單に當事者だけの問題ではなくて、全教擧げての問題である。

時は刻々と流れる。今日の少年は、明日の國家を脊負ひ立つ柱石である。

このことは家庭も教團も國家も同じことである。

○

人を育てるといふこと、人を自分の型にはめ込もうとする事とは似て非なるものである。

人を本當に育てようとする人は、相手の心持ちを本氣で聞く人でなければならぬ。相手の心持も聞かずに、得たり賢しと自分の說をまくし立てる人は、人をして自分の型にはめ込まうとする人であつて、決して人を育てる人ではない。

高い處に立つて自分の云ひ分ばかりを、さも得意げにまくし立てゝ、それで教育者で御座ゐ、宗教家で御座ゐと思ふてゐては大變な事である。そんなものは教育者でも宗教家でもない。眞に人を育てようと思ふならば、高い處に立つのでなく、同じ處に立つて、心ゆくまで相手の心の中に溶け込んで行かねば嘘である。

喋る口を持つよりも、聞く耳を持つ方が大切である。今日の教家は口のみ發達して、耳が失はれてはゐないだらうか。これ

は互ひに反省しなければならぬ事だと思ふ。

○

弱い身體にはバクテリヤはすぐ喰ひ付くらしいが健康な身體にはなか〳〵喰ひ付けぬらしい。

病菌も馬鹿にはならぬが、病菌を恐れるよりも、病菌に喰ひ付かれ易いこちらの質素を恐れなければならぬ。

濡れた莚にはなか〳〵火は付かぬが、乾き切つた莚には一寸した火でも一遍に燃え移る。

ある人が夜店の商人から三圓五拾錢の御召の反物を買つた。いゝ買物をしたと喜んでゐたが、後になつて喰はせものであつたことに氣がついて、大變悔んで夜店の商人は惡いと怨んでゐた。

果して夜店の商人だけが惡いのであらうか。

自分に深い慾があつたから引つかゝつたのであつて、御召の反物がそんなに安く買へる筈はないのだからと、こちらさへ手出ししなければ自分もだまされずに濟んだらうし、人もうらまずに濟んだものを。

損するのは慾の深いものに限る。信心に强慾は禁物である。

○

生れたばかりの赤ン坊も、一夏一冬を越すと可也丈夫になるものである。

それは暑い夏と、寒い冬とを越すと抵抗力といふものが出來るからである。

信心でも一夏一冬を越さねば本物にはならぬ、大概の人は行

き詰つたドン底で信心を求める。そして順境になつて苦しみがなくなつて來ると、いつとはなしに信心が薄れてゆく。苦しい時の神頼みといつた信心なら誰れでもする。苦しさが過ぎたら信心も解消する。こんなものを信心だと思ふと大間違ひである。

信心は順逆、禍福いづれの時に遭遇しても、少しも狂ふことなく、折に觸れ、事に當る毎に、堅實に延びてゆくのでなくては嘘である。

平和な時だけ大きなことを云つてゐても、一朝破產だ、大病だ、死だ、失戀だとなると平靜を失つてしまふやうでは、何の信心だか分らぬ。コレでは眞物ではない。

幸福の頂上にも、不幸のドン底にも動じないものがなくては

ならぬ。

一夏一冬を越すことは肉體の成育にも、魂の成人にも大切なことである。

○

本當に欲しいものを買つた時、本當に望んでゐたものを手に入れた時には、自分の財布のお金が減つたことより、買へた喜び、手に入れたうれしさの方がはるかに大きい。

財布の金が減つた事を悔いたり、惜しんだりしてゐる間はまだ本當に欲しいもの、好きなものを手に入れた事のない證據である。

自分の財布を使ひ果しても、自分の一生を棒に振つても、悔いも惜しみも殘らぬやうな、欲しいもの、好きなものを持つて

ゐるか。

壽命といふ尊い無限の財寶を惜しげもなくポンとほり出して何を買ひ何を摑むか。

これが人間の一番大きい仕事だ。この買物が見つからなくつて困つてゐる人が多いのぢやないか。

この買物さへ見出したらもう安心なものである。

○

先方の徳が非常に高くて、その徳の輝きが自分自身の上に迫つて來たといふやうな時には、自然に頭が下つて、拜まずにはゐられぬやうになる。これが拜み方の一つ。

更にもう一つの拜み方は、敎へをだん〳〵深く悟らして頂くやうになると、自分の無力、自分の正體といふものがおひ〳〵

わかつて來て、今までのもつてゐた自分の『我』といふものが打ち碎かれてしまふ。その時には相手の誰であらうと、拜まずにはゐられぬ氣持になる。

前の拜み方は誰にでもあることであるが、後の拜み方は信心のある人でなくては出來ぬ拜み方である。

後の拜み方には、先方の徳がどうのかうのと、そんなことにかゝはることなく、いついかなる場合にも、拜まずにはゐられぬのであるから、拜み方としては一番たしかなものであらう。

相手に拜まされるのでなく、自分を掘り下げることによつて、內から湧き上つて來る拜み方であるから、これが本當の拜み方であらう。

○

素直といふことは何でもない事のやうであるが、なか〳〵むつかしい、例へば物を貰ふことでも、素直に出來る人はなかなかないと思ふ、物を貰ふことが素直に出來るやうな人ならば、物を上げることも亦素直に出來るものである。

何かしら、上げるときにも、貰ふときにも、心がひつかゝるものである。これが何のひつかゝりもなく、淡々たる水の如く素直に出來たら、それは大したものである。

葉落

（定價　六十錢）

昭和十五年六月二十日印刷
昭和十五年六月廿六日發行

奈良縣丹波市町川原城
著者　岡島藤人

奈良縣丹波市町川原城
印刷兼發行者　天理時報社
右代表者　岡島善次

奈良縣丹波市町川原城三〇七
發行所　天理時報社
振替口座　東京一三八二二　大阪二八四二一

終